

陣^{じん}之^の尾^お遺^い跡^{せき}

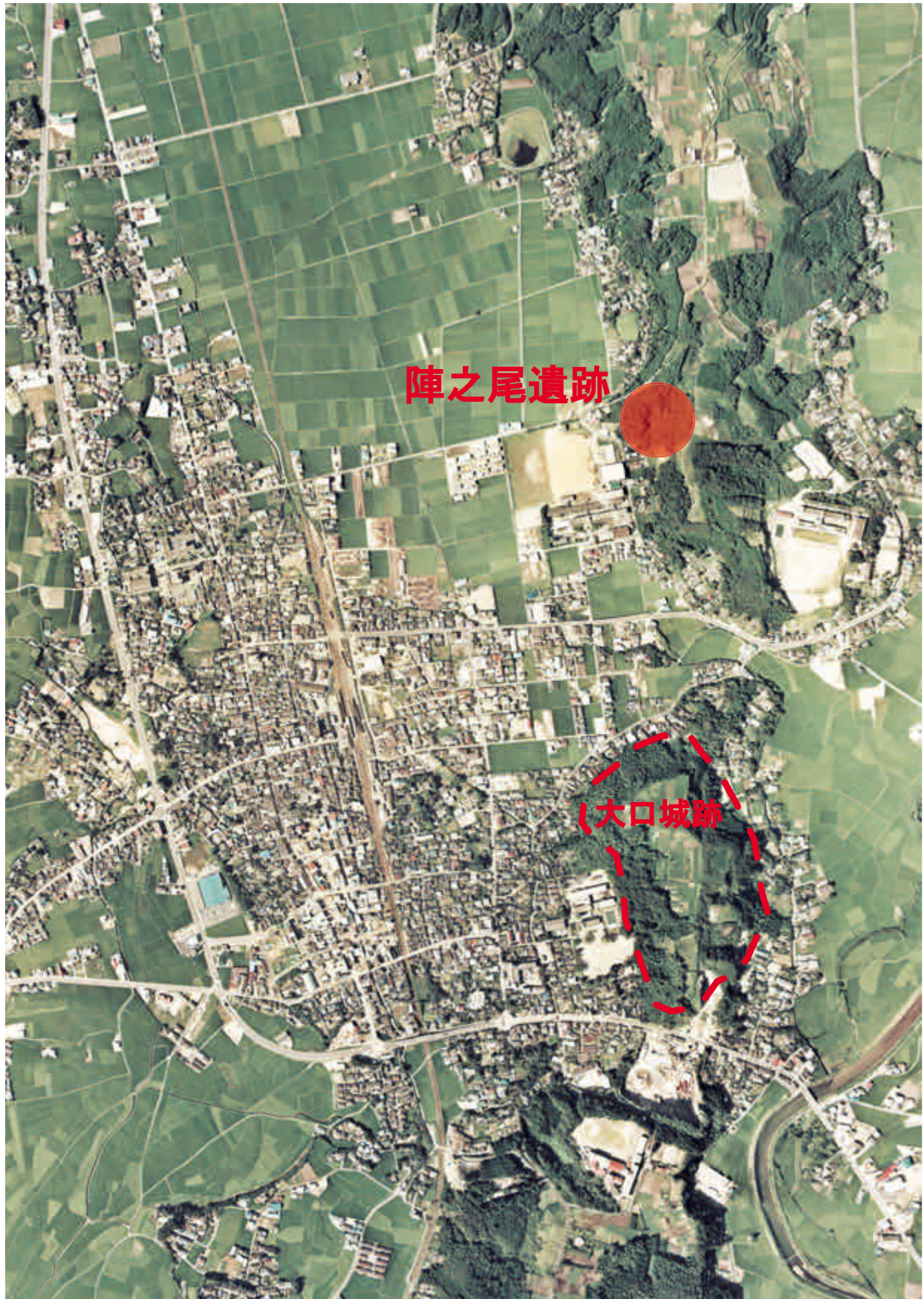
(鹿児島県大口市篠原)



陣之尾遺跡

2009年1月

鹿児島県立埋蔵文化財センター



上空から見た陣之尾遺跡（昭和51年度）

国土画像情報（カラー空中写真）国土交通省

序 文

この報告書は、国道267号道路改良事業に伴って、平成17年度に実施した陣之尾遺跡の発掘調査の記録です。

この遺跡は、大口市篠原に所在し、縄文時代早期から中・近世にわたる遺構・遺物が発見されました。特に、注目されるものとしては、縄文時代早期の耳栓状土製品（土製耳飾り）が2点出土したことで、古墳時代の地下式横穴墓が1基検出されたことです。これは、それぞれの時期における地域性を語る上で貴重な発見となりました。

本報告書が、県民の皆様はじめ多くの方々に活用され、埋蔵文化財に対する関心と御理解をいただくとともに、文化財の普及・啓発の一助となれば幸いです。

最後に、調査に当たり御協力いただいた県大口土木事務所をはじめ、大口市の関係部局、関係各機関並びに発掘調査に従事された地域の方々に厚くお礼申し上げます。

平成21年1月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長 宮原 景信

報告書抄録

ふ り が な	じんのおいせき							
書 名	陣之尾遺跡							
副 書 名	国道267号線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻 次								
シ リ ーズ 名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	134							
編 集 者 名	吉井秀一郎，國師洋之，井口俊二							
編 集 機 関	鹿児島県立埋蔵文化財センター							
所 在 地	〒899－4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森 2 番 1 号 TEL0995－48－5811							
発行年月日	2009年1月29日							
ふ り が な 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調 査 起 因
		市町村	遺跡番号	。 、 ′ ″	。 、 ′ ″			
じんの お 陣之尾遺跡	かごしまけん 鹿児島県 おおぐちし 大口市 しのはらあざ 篠原字 じんの お 陣之尾	46209	9-31	32 ° 4 ′ 00 ″	130 ° 36 ′ 51 ″	確認調査 20041225～ 20050117 (大口市教育委員会) 本調査 20050516～ 20050628	150 700	国道267号線道 路改良事業
所収遺跡名	種 別	主 な 時 代		主 な 遺 構		主 な 遺 物		特 記 事 項
陣之尾遺跡	散布地 散布地 墓 散布地	縄文時代早期 縄文時代晩期 古墳時代 中・近世		集石遺構 5 基 地下式横穴墓 1 基 土坑 1 基 溝状遺構 2 条 土坑 1 基		平椀式土器，押型文土器， 中原式土器，耳栓状土製品， 石鏃，スクレイパー，磨石 ・ 敲石，石皿・台石，石核 土器片，剥片		
遺跡の概要	陣之尾遺跡では縄文時代早期から中・近世までの遺構・遺物が発見された。縄文時代早期の耳栓状土製品（土製耳飾り）が2点出土した。 古墳時代の遺構は，地下式横穴墓が検出された。この地下式横穴墓は，竪穴上面を塞ぐために板石を用いており，当地方の特徴を備えている。なお，副葬品等は出土しなかった。							



遺跡位置図 (1 : 25,000)

例 言

- 1 本書は、国道267号道路改良事業に伴う陣之尾遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡は、鹿児島県大口市篠原に所在する。
- 3 発掘調査は、鹿児島県大口土木事務所から依頼を受け、平成16年度に大口市教育委員会が確認調査を、平成17年度に鹿児島県立埋蔵文化財センターが本調査を実施した。
- 4 整理作業及び報告書作成は、平成20年度に鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。
- 5 遺物番号については、通し番号とし、本文・挿図・図版の番号は一致する。
- 6 挿図の縮尺は、各図面に示した。
- 7 本書で用いたレベル数値は、海拔絶対高である。
- 8 発掘調査における図面の作成、写真の撮影は、日高正人・國師洋之が行った。
- 9 遺構実測図のトレースは、國師洋之が行った。土器及び石器の実測・トレースは、整理作業員の協力を得て國師洋之が行った。
- 10 遺物の写真撮影は、西園勝彦が行った。
- 11 巻頭カラーで示した、大口城跡については、鹿児島県埋蔵文化財報告書（43）「鹿児島県の中世城館跡―中世城跡調査報告書―」の分布図4を参考に、「国土画像情報（カラー空中写真）」（国土交通省）の写真に破線で示したものである。
- 12 本書の執筆、編集者は次のとおりである。

第Ⅰ章 國師洋之，吉井秀一郎，井口俊二	第Ⅱ章 吉井秀一郎，國師洋之
第Ⅲ章 國師洋之，井口俊二	第Ⅳ章 國師洋之，吉井秀一郎
第Ⅴ章 國師洋之，吉井秀一郎	
- 13 遺物は、鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し、展示・活用する計画である。なお、陣之尾遺跡の遺物注記の略号は「ジン」である。

目 次

序文

報告書抄録

遺跡位置図

例言

目次

I 章 発掘調査の経過

第1節 調査に至るまでの経過	1
第2節 調査の組織	1
第3節 調査の経過（日誌抄）	2

II 章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	4

III 章 確認調査の概要と成果

第1節 確認トレンチの状況及び土層断面図	9
第2節 集石遺構及び出土遺物	14
1 集石	14
2 遺物	14

IV 章 本調査の概要と成果

第1節 本調査の方法	17
1 調査範囲及びグリッド設定	17
2 遺跡の層位	17
第2節 縄文時代の調査	20
1 集石遺構	20
2 土器	27
3 石器	30
第3節 古墳時代の調査	37
1 1号土坑	37
2 地下式横穴墓	38
第4節 中・近世の調査	39
1 2号土坑	39
2 溝状遺構	39

V 章 まとめ	41, 42
---------------	--------

挿 図 目 次

第1図	周辺遺跡位置図	7
第2図	土層模式図	9
第3図	確認トレンチ位置及び遺跡範囲	10
第4図	確認トレンチ土層断面図(1)	11
第5図	確認トレンチ土層断面図(2)	12
第6図	集石遺構及び出土遺物分布図	13
第7図	1号集石実測図	14
第8図	出土土器実測図	14
第9図	出土石器実測図	16
第10図	基本層序	17
第11図	調査範囲と周辺の地形	18
第12図	土層断面図	19
第13図	集石遺構配置図	20
第14図	2号集石遺構実測図	21
第15図	2号集石遺構内遺物(石皿)実測図(1)	21
第16図	2号集石遺構内遺物(石皿)実測図(2)	22
第17図	3号集石遺構実測図	23
第18図	4号集石遺構実測図	24
第19図	5号集石遺構実測図	25
第20図	縄文土器・耳栓状土製品出土分布図	26
第21図	耳栓状土製品実測図	27
第22図	縄文土器実測図	28
第23図	縄文石器出土状況	29
第24図	石鏃実測図(1)	32
第25図	石鏃実測図(2)及び石錐実測図	33
第26図	スクレイパーほか実測図	34
第27図	石核実測図	35
第28図	磨石ほか実測図	36
第29図	古墳時代遺構配置図	37
第30図	1号土坑実測図	37
第31図	地下式横穴墓実測図	38
第32図	中・近世遺構配置図	39
第33図	2号土坑実測図	39
第34図	溝状遺構実測図	40

表 目 次

第1表	周辺の遺跡地名表	8
第2表	確認トレンチの調査結果	9
第3表	土器観察表	16
第4表	石器計測表	16
第5表	2号集石遺構内遺物(石皿)計測表	24
第6表	土器観察表	28
第7表	石器計測表(1)	33
第8表	石器計測表(2)	35
第9表	石器計測表(3)	36

図 版 目 次

写真図版1	大口市街地を望む, 調査前風景	43
写真図版2	調査風景, 土層断面(15トレンチ), IV・V層遺物出土状況(B・C-7 区)	44
写真図版3	1号集石検出状況, 2号集石検出状 況, 5号集石検出状況	45
写真図版4	2T出土状況, 15T内IV層OB出土 状況, 14T内III・IV層遺物出土状況, 耳栓状土製品出土状況(IV層, C- 7区)	46
写真図版5	地下式横穴墓検出状況, 地下式横穴 墓・ふた石, 地下式横穴墓完掘状況	47
写真図版6	1号溝状遺構完掘状況(II層, BC -3・4区), 2号土坑完掘状況(B -2区), 2号溝状遺構完掘状況(C ・D-5・6区)	48
写真図版7	2号集石遺構内遺物	49
写真図版8	III・IV層出土石器, IV層出土耳栓状 土製品	50
写真図版9	IV層出土石器	51
写真図版10	III層出土石核, IV層出土石器	52

第Ⅰ章 発掘調査の経過

第1節 調査に至るまでの経過

鹿児島県教育委員会は、文化財の保護・活用を図るため、各開発関係機関との間で、事業区域内における文化財の有無およびその取り扱いについて協議し、諸開発との調整を図っている。

鹿児島県土木部道路建設課（大口土木事務所）（以下、土木部）は、大口市内に計画した国道267号線道路改良事業に先立って、対象地内における埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化財課（以下、文化財課）に照会した。

これを受けて、文化財課は平成13年度に分布調査を実施した。分布調査の結果、事業区内に、里町遺跡、陣之尾遺跡、芳ヶ迫遺跡が確認された。そこで、土木部、文化財課、県立埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）の三者で協議を行い、陣之尾遺跡の遺跡範囲と性格を把握するために、確認調査を実施することとなった。

確認調査は、大口市教育委員会が担当し、陣之尾遺跡の西側約8,900㎡を調査対象とした。調査は、平成16年12月25日から平成17年1月17日まで実施し、約700㎡の範囲に遺跡が残存していることが確認された。

そこで、土木部、文化財課、埋文センターは再度協議し、当事業区域内では現状保存や設計変更が不可能なことから、記録保存のため本調査を実施することとなった。

本調査は平成17年5月16日から6月28日まで、約700㎡を対象として、埋文センターが担当した（実働28日）。

整理作業及び報告書作成作業は、平成20年度に埋文センターにおいて行った。

第2節 調査の組織

1 確認調査（平成16年度）

事業主体者	鹿児島県土木部道路建設課				
調査主体者	大口市教育委員会				
調査責任者	〃	教	育	長	若松 修身
調査企画者	〃	生	涯	学	習
		課	長	内山	和行
		生涯学習課文化財係長	中島	修	
調査担当者		生涯学習課文化財係主事	中村	守男	
		生涯学習課文化財係主事補	益満	亮太	
調査指導者	鹿児島県教育庁文化財課	文	化	財	主
		事	堂込	秀人	

2 本調査（平成17年度）

事業主体者	鹿児島県土木部道路建設課				
調査主体者	鹿児島県教育委員会				
調査企画調整者	鹿児島県教育庁文化財課				
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所	長	上今 常雄	

調査企画者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	次 長 兼 総 務 課 長	有川 昭人
	〃	次 長 兼 調 査 第 一 課 長	新東 晃一
	〃	主任文化財主事兼調査第一課第一調査係長	池畑 耕一
	〃	主 任 文 化 財 主 事	中村 耕治
調査担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	文 化 財 主 事	日高 正人
	〃	〃	國師 洋之
事務担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	主 幹 兼 総 務 係 長	平野 浩二
	〃	主 事	福山恵一郎

3 整理・報告書作成（平成20年度）

事業主体者	鹿児島県土木部道路建設課		
調査主体者	鹿児島県教育委員会		
調査企画調整者	鹿児島県教育庁文化財課		
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所 長	宮原 景信
調査企画者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	次 長 兼 総 務 課 長	平山 章
	〃	次 長	池畑 耕一
	〃	主任文化財主事兼調査第一課第一調査係長	長野 眞一
整理担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	文 化 財 主 事	吉井秀一郎
	〃	〃	井口 俊二
事務担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	総 務 係 長	紙屋 伸一
	〃	主 事	鳥越 寛晴
企画委員			國師 洋之
報告書作成検討委員会	平成20年 8 月 8 日	所長ほか	8 名
報告書作成指導委員会	平成20年 7 月30日	池畑次長ほか	5 名

第 3 節 調査の経過（日誌抄）

1 5月16日（月）～5月20日（金）

発掘調査の環境整備（樹痕伐採・道具の搬入・テント及びトイレの設置）。トイレの耐風対策。重機の設置。グリッド杭打ち。Ⅱ層掘り下げ。遺物取り上げ。

2 5月23日（月）～5月27日（金）

B・C－3・4区の溝状遺構の完掘及び平板実測。C・D－6・7区の溝状遺構の完掘及び平板実測。Ⅲ層掘り下げ。トレンチ配置図作成。遺物取り上げ。

3 6月1日（水）～6月3日（金）

C・D－6・7区の溝状遺構の断面写真撮影。14・15トレンチの下層確認。B・C区遺物出土状況写真撮影及び平板実測。グリッド杭の打ち直し。B・C－5区のⅢ・Ⅳ層遺物出土状況写真撮影。B・C－5・6区及びB・C－2・3区の遺物取り上げ。

4 6月7日（火）～6月11日（土）

地形コンター測量。14トレンチ～16トレンチの掘り下げ。B－1～4区のセクションベルト断面精査。C－6区石鏟検出状況写真撮影及び取り上げ。IV層掘り下げ。B－6区IV層上面で耳栓が出土。C・D－6・7区で3号集石検出。6月11日（土）に現地説明会を開催（参加人数101人）。

5 6月13日（月）～6月17日（金）

B・C－1～3区のⅢ・Ⅳ・Ⅴ層掘り下げ及び遺物取り上げ。2号～5号集石の検出状況写真撮影及び実測。14トレンチ遺物取り上げ。

6 6月20日（月）～6月24日（金）

B・C－7区Ⅳ・Ⅴ層の遺物出土状況写真撮影及び取り上げ。15・16トレンチ土層断面図作成。プレハブ事務所，作業員詰所，倉庫の撤収。遺跡周辺の環境整備。

7 6月27日（月）～6月28日（火）

B－2区において地下式横穴墓を検出。写真撮影及び実測。B－2区土坑とC－3区土坑の写真撮影及び実測。セクションベルト土層断面図作成。Ⅳ・Ⅴ層遺物取り上げ。



【現地説明会での発掘体験】

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

大口市は鹿児島県の最北部に位置し、北は熊本県水俣市・人吉市、東は宮崎県えびの市、南東部は菱刈町、南部はさつま町、西部は出水市と接し、大口盆地を形成している。昭和29年に、旧伊佐郡の大口町、山野町、羽月村、西太良村が合併し大口市として市制を施行し、昭和35年には伊佐郡菱刈町市山の一部を編入している。面積は292.15km²、人口は約2.1万人（平成19年度）を数える。

大口盆地は、東に霧島山系、西に矢筈山及び上場高原、南に鳥帽子岳山系、南西に紫尾山系、北に国見山、間根ヶ平山系囲まれている。このように四方を山地に囲まれ、最低海拔高度100m、平均海拔高度180mの高地に位置しているため、鹿児島県内のほかの地域に比べて内陸的な気候を示し、冬は寒く夏は日中暑いことが多い。

また、盆地中央部は、羽月川、水之手川、牛尾川等の中小河川が山地から流入し、川内川に合流している。市の南東部で曾木の滝を下り、大鶴湖（鶴田ダム人工湖）に流入している。この川の浸食と堆積によって、沖積低地や河岸段丘が形成されている。流域では、稲作が盛んで、県内有数の水田地帯である。盆地中央部と山地の間、そして南部には、入戸火砕流堆積物によるシラス台地が広がっている。

陣之尾遺跡は、大口市街地東方の陣之尾地区にある。この地区は北から延びる舌状丘陵の南端付近に位置し、標高は約220mである。また、台地上は畑地として耕作に利用され、ゆるやかな斜面部分は林地となっている。地区の東方、西方ともに、田地がひらけている。

県境の久七峠から大口市街へ国道267号線が走り、このバイパスの予定地に本遺跡は位置している。

第2節 歴史的環境

大口地方は、鹿児島県の考古学の先覚者である木村幹夫、寺師見国の両氏らによって、戦前から精力的な調査が行われた。その結果、縄文土器研究の基礎となった遺跡や、古墳の調査が多数行われている。以下に、大口地方の歴史的環境を時代ごとにみていく。

1 旧石器時代

日東遺跡、五女木遺跡、新開原遺跡、小野原遺跡などが確認されている。日東遺跡、五女木遺跡は、いずれも黒曜石の原産地で、日東遺跡ではナイフ形石器や細石器等が出土し、五女木遺跡では尖頭器や石核、削器等が採集された。

2 縄文時代

手向山遺跡、日勝山遺跡、並木遺跡が所在し、手向山式土器、日勝山式土器、並木式土器は、これらの遺跡を標識としている。

3 弥生時代

大口盆地内には、弥生時代の遺跡が少なく、土器を含む弥生時代の遺物はほとんど出土していない。石包丁・磨製石鎌・挟入片刃石斧等が採集されているが、詳細な出土地は不明である。

4 古墳時代

大口市の位置する川内川上流域は、古墳の密集地帯として知られているが、前方後円墳などの高塚古墳、いわゆる畿内型古墳は存在しない。本県を含む南九州において、畿内型古墳の分布は、薩摩半島側の出水郡長島町や阿久根市に分布している以外は、大隅半島側の志布志湾沿岸の肝属平野に集中するという特徴がみられる。大口市では、瀬ノ上遺跡、平田遺跡等から、地下式板石積石室墓、地下式横穴墓が数多く確認されている。地下式板石積石室墓は、川内川流域から熊本県南部まで広く分布し、地下式横穴墓は宮崎県から大隅地方・北始良・伊佐に限定して分布している。このように、大口地方は、東シナ海側に分布する地下式板石積石室墓と太平洋側に分布する地下式横穴墓の分布が重なり合っているところに大きな特色があることがわかる。平田遺跡では地下式板石積石室墓が140基、瀬ノ上遺跡では地下式板石積石室墓が3基と地下式横穴墓が11基、成就寺地下式横穴群では2基が確認されている。

また、南九州には、他にも特徴のある独自の埋葬形態が存在している。立石土坑墓である。また、下ノ原B遺跡では、竪穴住居跡が確認されている（平成19年度埋蔵文化財センター業務報告会資料）。

5 古代

早くから火葬墓（蔵骨器）が発見されている。鳥巢遺跡では、2個体の須恵器壺を利用した火葬墓が発見された。荻原遺跡、斧トキ遺跡、原田遺跡でも須恵器の火葬墓が発見されている。

6 中世～近世

大口という地名の起こりについては、諸説があり明らかにすることは難しいが、文献史料（『太秦氏誠忠録』、『両院古雑徴』、『日新菩薩記』、『求麻外史』等）に、「大口」の文字を見て取れるので、大口という地名は1500年頃を境に使われていることが推察される。

大口城は、「牛山城」または「牟田口城」ともいい、鎌倉時代、南北朝時代、室町時代の戦乱の間に居城とする者も、大口地方に置かれた牛屎院を領していた牛屎氏、島津氏（忠明）、菱刈氏と代わっている。

また、島津貴久、義久、義弘による薩摩・大隅・日向の三州統一の過程で、貴久は、永禄十年（1567）に大口城の菱刈隆秋を攻め、隆秋は人吉の相良氏に救いを求めたが敗れ、島津義弘の軍門に下り、曾木に移った。代わって、島津氏の支族の、新納忠元が地頭として大口城に入っている。

忠元は、秀吉による九州征伐（天正十四年、十五年）の際には、島津義久、義弘が秀吉の軍門に下った後も大口城に拠って、容易に和議に応じず、秀吉が派遣した石田三成と伊集院忠棟による下城の勧告にも応じなかったが、義久、義弘の遣わした使者のすすめにより、「天正十五年五月二十四日秀吉の先鋒曾木に進む。二十五日秀吉大隅を義弘に、日向諸県郡を久保に与える。二十六日秀吉曾木に進む。新納忠元来て拝謁。二十七日秀吉薩摩を去り肥後に帰る」（川内市史）とあるように、ようやく下城を決断して秀吉に謁見している。よって、大口市内には太閤秀吉にまつわる伝承も数多く残っている。

江戸時代の薩摩藩では、藩内を城下（内城 鹿児島）と外城に分けて配置し、城下に居住している武士を城下士、または家中と呼び、地方の外城に居住する武士を外城衆中（のちに郷士）と呼んでいた。藩の直轄地には地頭が置かれ、初期は任地に赴き政を執り行っていたが、藩の中央集権の

制度が整うにつれて、鹿児島城下に居住し藩の役目を務め、任地には地頭代を置いていた。大口地方は藩の直轄地であったので、大口地頭、羽月地頭、山野地頭、曾木地頭が置かれていた。

また、昭和55・56年に中世の山城である平泉城が調査された。堀、曲輪、掘立柱建物跡などの遺構が検出され、多量の陶磁器、古銭、釘、石臼などの遺物が出土している。考古資料と文献史料がおおよそ一致しており、鹿児島県の中世城館跡の研究の貴重な資料となっている。

【引用・参考文献】

鹿児島県大口市教育委員会1982「平泉城跡」『大口市埋蔵文化財発掘調査報告書』 1

鹿児島県大口市教育委員会1986「瀬ノ上遺跡・平田遺跡」『大口市埋蔵文化財発掘調査報告書』 5

鹿児島県大口市教育委員会1987「島巡遺跡」『大口市埋蔵文化財発掘調査報告書』 6

鹿児島県大口市教育委員会1990「松尾山遺跡」『大口市埋蔵文化財発掘調査報告書』 7

鹿児島県大口市教育委員会1999「郡山遺跡」『大口市埋蔵文化財発掘調査報告書』 14

鹿児島県大口市教育委員会2006「関白陣跡、里町遺跡」『大口市埋蔵文化財発掘調査報告書』 26

鹿児島県教育委員会1999『北薩・伊佐地区埋蔵文化財分布調査報告書（Ⅷ）大口市（一部）・菱刈町』

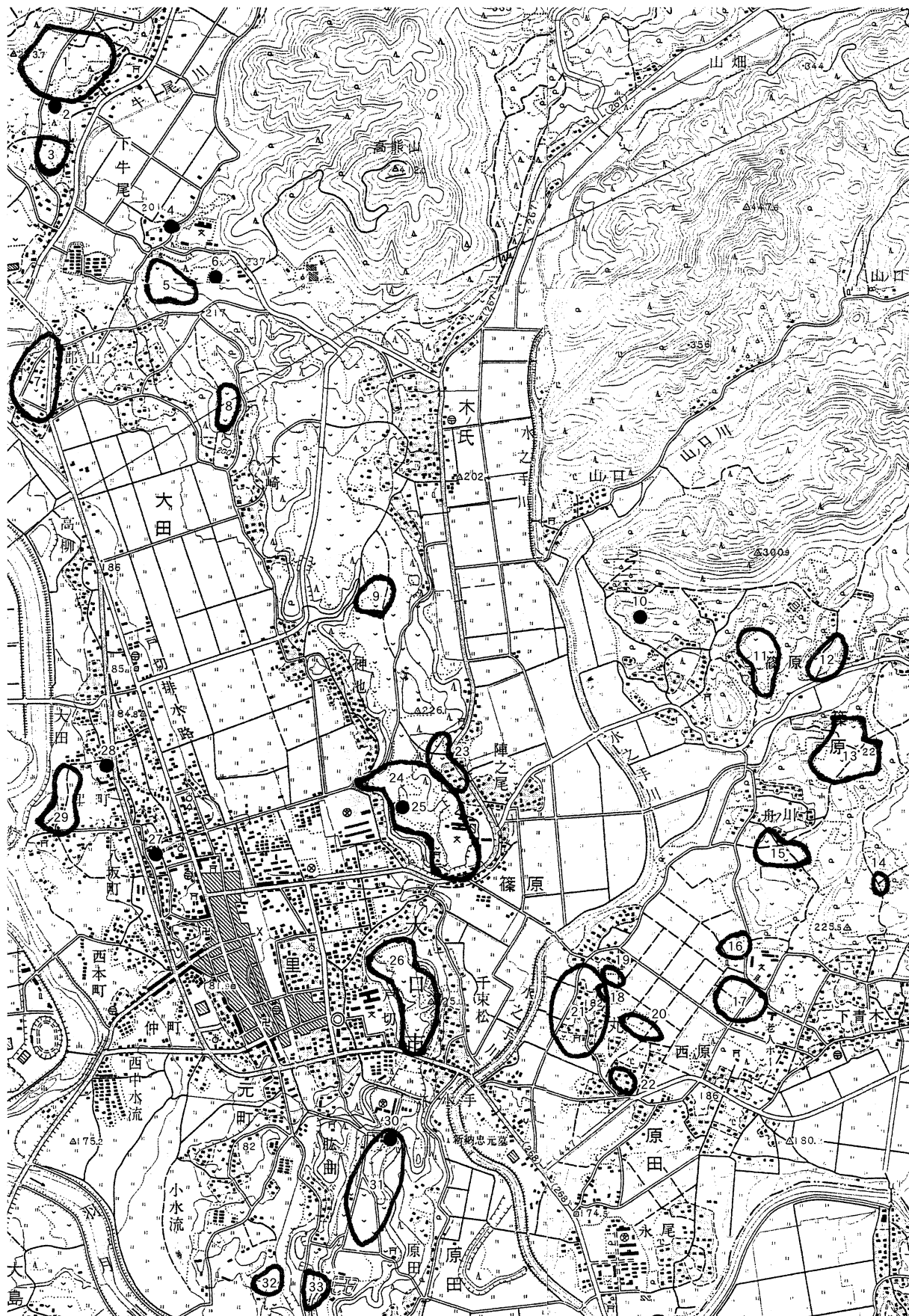
鹿児島県教育委員会2005『先史・古代の鹿児島』

大口市郷土誌編さん委員会1999『大口市郷土誌』上巻

寺師見国1957「鹿児島県の地下式土壇」『鹿児島県文化財調査報告書』 4



調査風景



第1図 周辺遺跡位置図 (1/25,000)

第1表 周辺の遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等	備考
1	牛尾城跡	大口市 牛尾	台地	中世(南北朝～戦国期)		県埋文報(43)
2	日勝山	大口市 山野小木原日勝山	丘陵	縄文(早・前・中)	押型文・曾畑式・塞ノ神式・阿高式・石斧・石鏃・飾玉・石匙	平成9年度北薩・伊佐分布調査
3	小城	大口市 牛尾小城	台地	縄文, 古墳	土器・黒曜石	
4	牛尾小学校	大口市 牛尾・牛尾小学校	丘陵	縄文(早・前・中・後)	押型文・塞ノ神式・阿高式・出水式	
5	木崎原	大口市 牛尾木崎原	台地	縄文	土器・黒曜石	平成9年度北薩・伊佐分布調査
6	木崎原	大口市 牛尾木崎原	丘陵	縄文(早・前)	押型文・轟式・塞ノ神式・石匙・石斧・石鏃	『考古学雑誌』22-10
7	郡山城跡	大口市 郡山	台地	旧石器, 縄文, 中世(戦国期)	ナイフ形石器・細石器・塞ノ神式・市来式・土師器	中世城跡, 平成5年調査, 市埋文報(4)
8	大儀司	大口市 大田大儀司	台地	縄文	土器・黒曜石	平成9年度北薩・伊佐分布調査
9	軍神ノ上	大口市 大田軍神ノ上	台地	縄文	土器・黒曜石	平成9年度北薩・伊佐分布調査
10	黒岩	大口市 篠原黒岩	丘陵	縄文(中・後)	阿高式・出水式	『史前学雑誌』8-6
11	篠原城跡	大口市 篠原城ヶ岡	丘陵	中世(室町)		篠原氏居城
12	島巡	大口市 篠原島巡	丘陵	縄文(前・中・晩), 古墳, 平安	轟式・春日式・阿高式・石槍・石鏃・飾玉・石匙	市埋文報(6)
13	星ヶ峯	大口市 篠原	低地	縄文	土器片散布地	平成3年分布調査, 市埋文報(16)
14	星ヶ峯	大口市 下青木字星ヶ峯	台地	縄文	塞ノ神式	
15	夫婦池	大口市 目丸	低地	縄文	土器片散布地	平成3年分布調査
16	東山	大口市 目丸	低地	古墳～中世	土器片散布地	平成3年分布調査, 市埋文報(17)
17	松之元	大口市 目丸	低地	古墳～中世	土器片散布地	平成3年分布調査, 市埋文報(17)
18	村中A	大口市 目丸村中	低地	古墳～中世	土器片散布地	平成3年分布調査
19	村中B	大口市 目丸村中	低地	古墳～中世	土器片散布地	平成3年分布調査
20	原之後	大口市 目丸	低地	古墳～中世	土器片散布地	平成3年分布調査, 市埋文報(16)
21	目丸城跡	大口市 目丸	台地	中世(南北朝～戦国期)		中世城跡
22	目丸	大口市 目丸	低地	縄文	土器片	平成12年分布調査
23	芳ヶ迫	大口市 木ノ氏芳ヶ迫	低地	古墳	土器片	平成13年分布調査
24	陣之尾城跡	大口市 篠原陣之尾	丘陵	縄文, 古墳～中・近世	土器片・耳栓・石鏃・石皿・地下式横穴墓	本報告書
25	成就寺 地下式横穴	大口市 里成就寺	台地	古墳	地下式横穴・鉄鏃・人骨片・鉄剣	県埋文報(4)
26	牛山城跡	大口市 里上ノ馬場	丘陵	中世(鎌倉)		別称「大口城」「牟田口城」
27	里町	大口市 里町	低地	弥生(後), 古墳	重弧文・須恵器	『史観』第7冊, 平成12年分布調査で範囲拡大
28	大田 地下式横穴	大口市 大田横手町	低地	古墳	地下式板石積石室・鉄鏃	『考古学雑誌』26-6
29	黒岩	大口市 大田黒岩	低地	縄文	土器片	平成12年分布調査, 市埋文報(25)
30	諏訪野 地下式土壙	大口市 里諏訪山	台地	古墳	地下式横穴・鉄鏃・人骨片・鉄剣	『考古学雑誌』26-6 市埋文報(2)(3)
31	忠元神社 附近	大口市 原田忠元丘	台地	弥生, 古墳	弥生土器・勾玉・棗玉・管玉・地下式横穴・須恵器・土師器	市埋文報(25)
32	原田	大口市 原田	低地	古墳		平成2年分布調査
33	丸尾山	大口市 原田丸尾山	台地	縄文	土器片	平成12年分布調査

第Ⅲ章 確認調査の概要と成果

確認調査は、分布調査の結果をもとに、改修事業分の用地買収が完了している、陣之尾遺跡の西半分、約8,900㎡の範囲について実施した。確認トレンチを13箇所設置し、遺構と遺物の包含層の有無を確認した。確認トレンチは2×6mの広さを基本とし、基盤層のシラス層まで掘り下げた。

調査の結果、1・2・3トレンチから、縄文時代のものと思われる遺物が出土し、2トレンチから、遺構も検出された。よって、遺跡の範囲は西側に限定され、範囲は約700㎡であると判断した（第3図）。

第1節 確認トレンチの調査結果及び土層断面図（第2表、第2～6図）

確認トレンチの調査結果を第2表に示した。

第2表 確認トレンチの調査結果

トレンチ	層	検出遺構・出土遺物	包含層の厚さ	包含層までの深さ	備考
1トレンチ	Ⅱ・Ⅲ	縄文土器・黒曜石剥片	60～80cm	60cm	
2トレンチ	Ⅱ・Ⅲ	集石遺構2基・縄文土器・黒曜石剥片	60～80cm	60cm	集石遺構（Ⅲ層）
3トレンチ	Ⅱ・Ⅲ	黒曜石剥片等	60～80cm	60cm	
4トレンチ	—	—	—	—	検出・出土なし
5トレンチ	—	—	—	—	検出・出土なし
6トレンチ	—	—	—	—	検出・出土なし
7トレンチ	—	—	—	—	検出・出土なし
8トレンチ	—	—	—	—	検出・出土なし
9トレンチ	—	—	—	—	検出・出土なし
10トレンチ	—	—	—	—	検出・出土なし
11トレンチ	表	—	—	—	石鏃1点
12トレンチ	—	—	—	—	検出・出土なし
13トレンチ	—	—	—	—	検出・出土なし

Ⅰ層	黒色土	20cm～60cm
Ⅱ層	黄褐色土	20cm
Ⅲ層	黒色土	60cm～80cm
Ⅳ層	シラス	

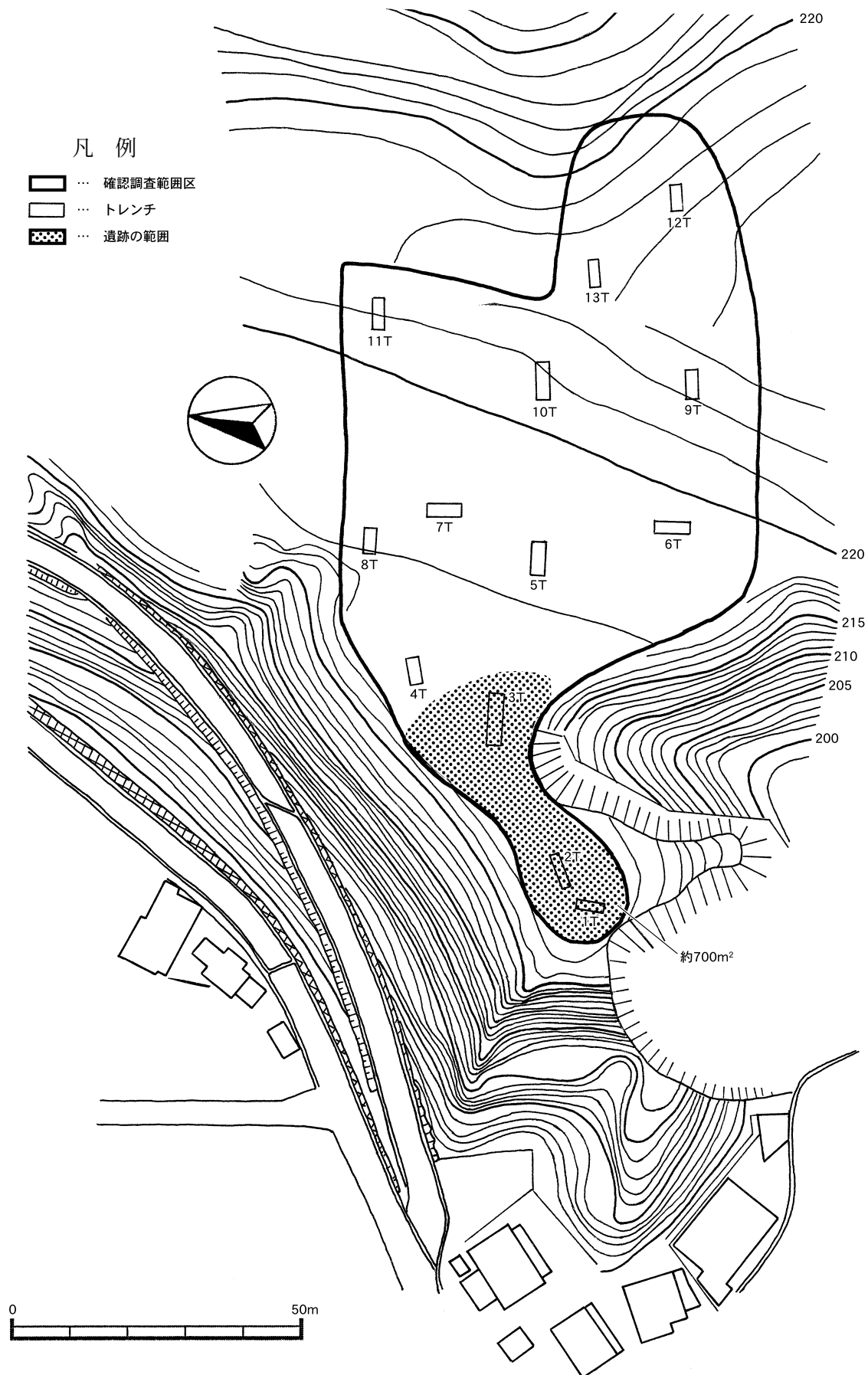
現在山林地であるが、以前畑等で開墾された痕跡有り。

アカホヤ火山灰土。上部には縄文時代の遺物を含む。

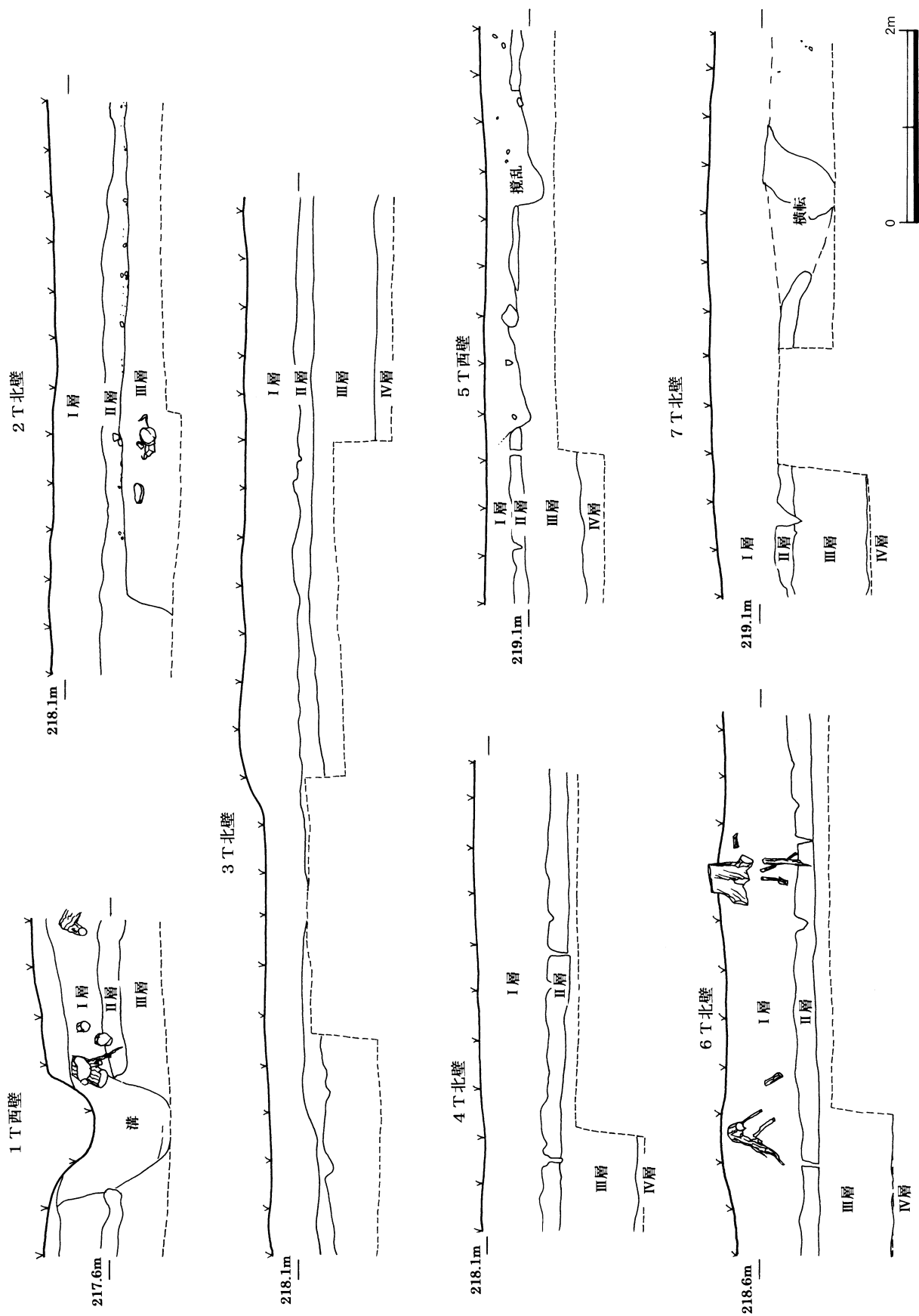
縄文時代早期の遺物包含層である。上部はやわらかいが下部は固くしまっている。

※ 確認調査と本調査時の土層区分は同一ではない。

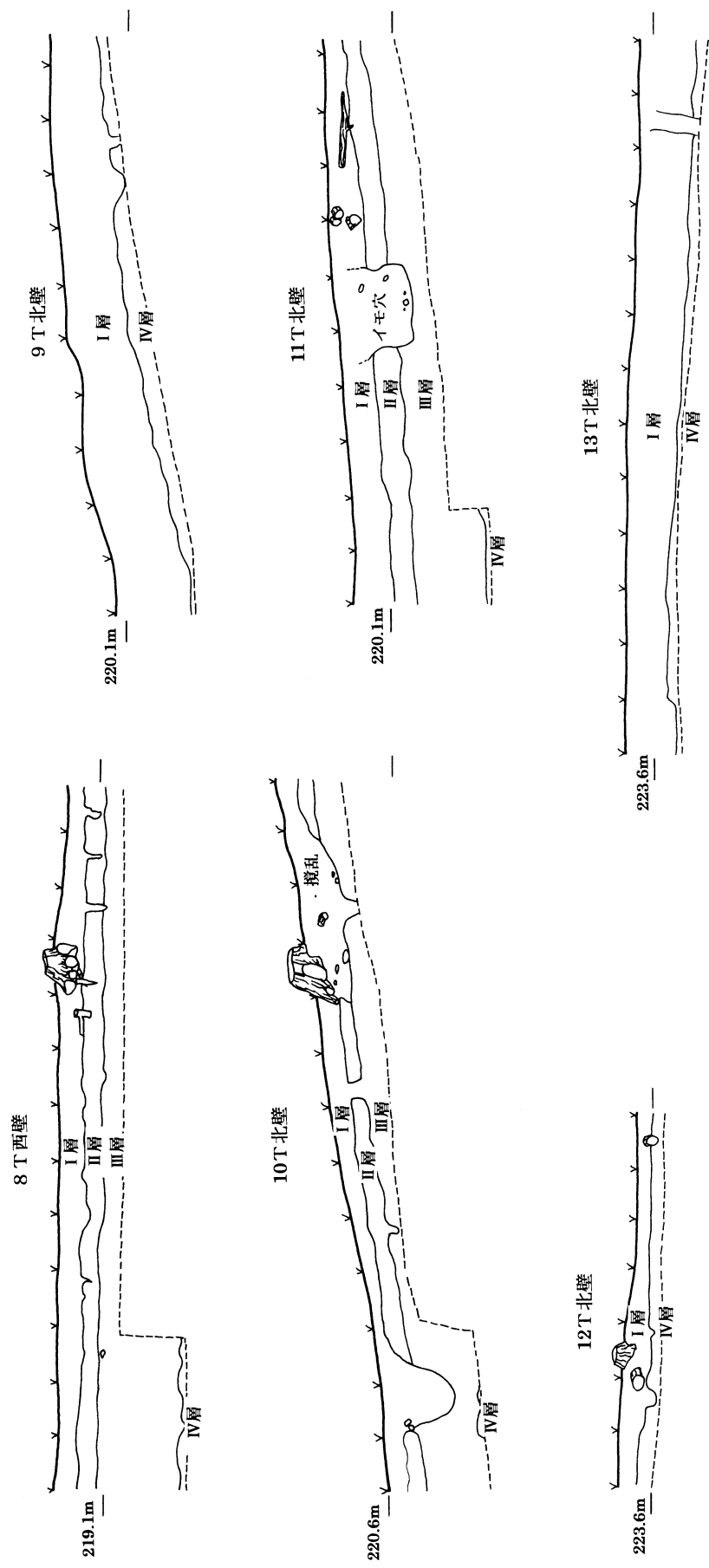
第2図 土層模式図



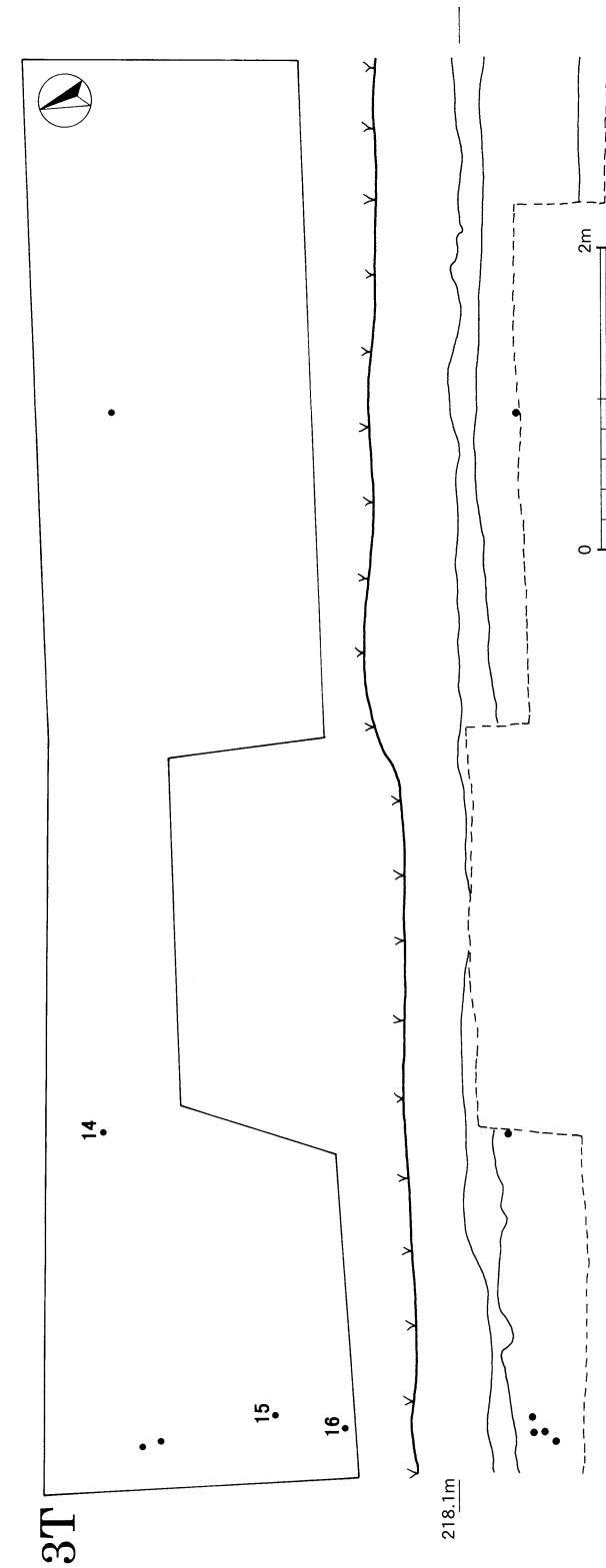
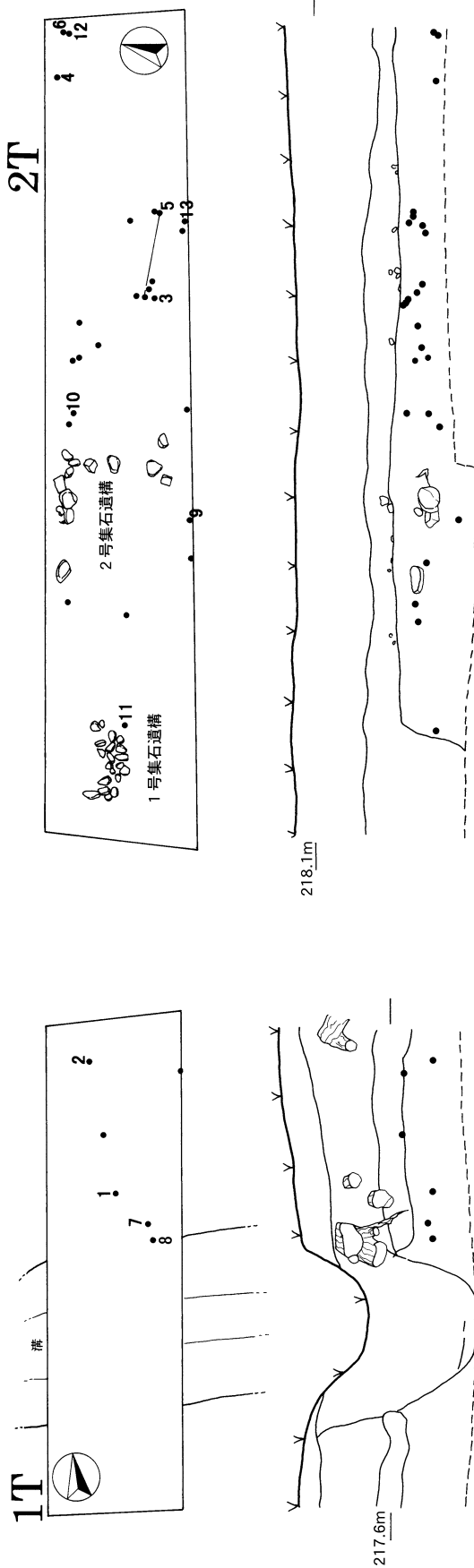
第3図 確認トレンチ位置及び遺跡範囲



第4図 確認トレンチ土層断面図(1)



第5図 確認トレンチ土層断面図(2)



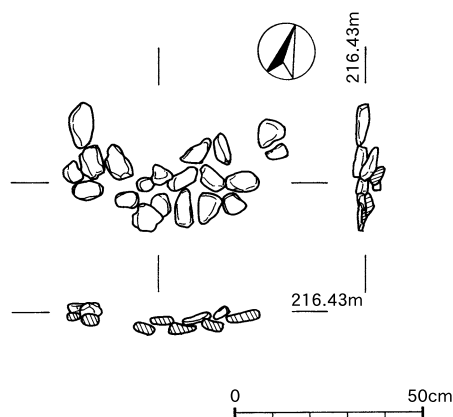
第6図 集石遺構及び出土遺物分布図

第2節 集石遺構及び出土遺物（第3・4表 第7～9図）

遺物は主に、Ⅲ層（黒色土）から出土した。しかし、若干ではあるが、Ⅱ層（黄褐色土）からも出土している。取り上げ点数は合計37点で、1トレンチから6点、2トレンチから25点、3トレンチから6点である。

また、2トレンチでは、Ⅲ層黒色土中から縄文時代早期のものと思われる集石を2基検出したが、掘り込みは確認できなかった。

1 集石（第7図）



第7図 1号集石実測図

1号集石は、三日月状に散らばる状態で、5～10cmの円礫が20個ほど集まっており、礫表面は熱を受けたためか赤く変色していた。

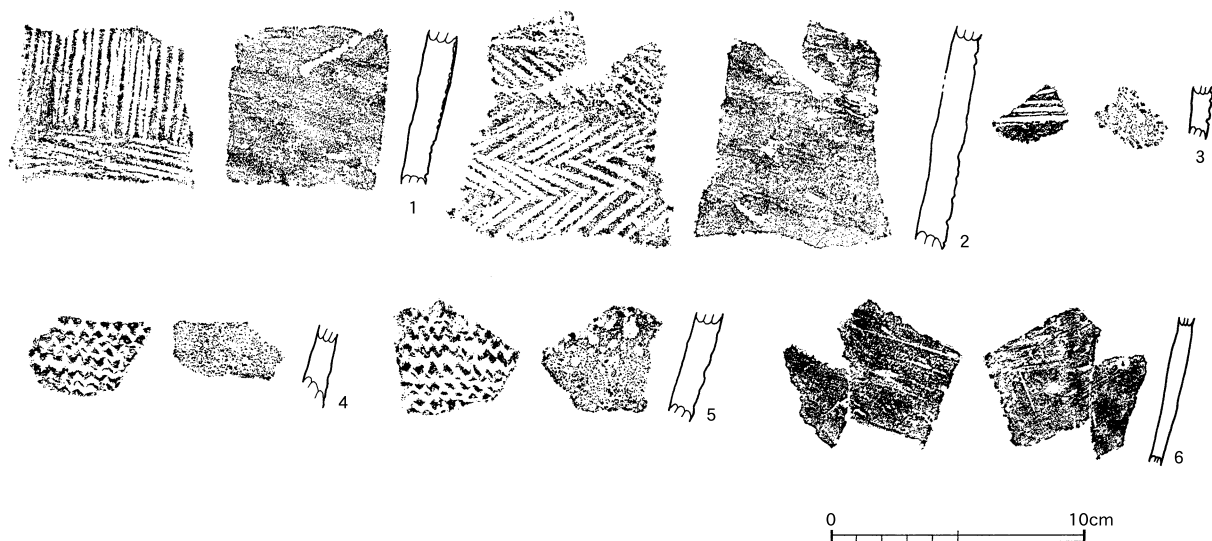
2号集石は、2トレンチ北側壁面近くに一部が露出した状態で検出されたため、本調査で完掘した。

2 遺物（第3・4表、第8・9図）

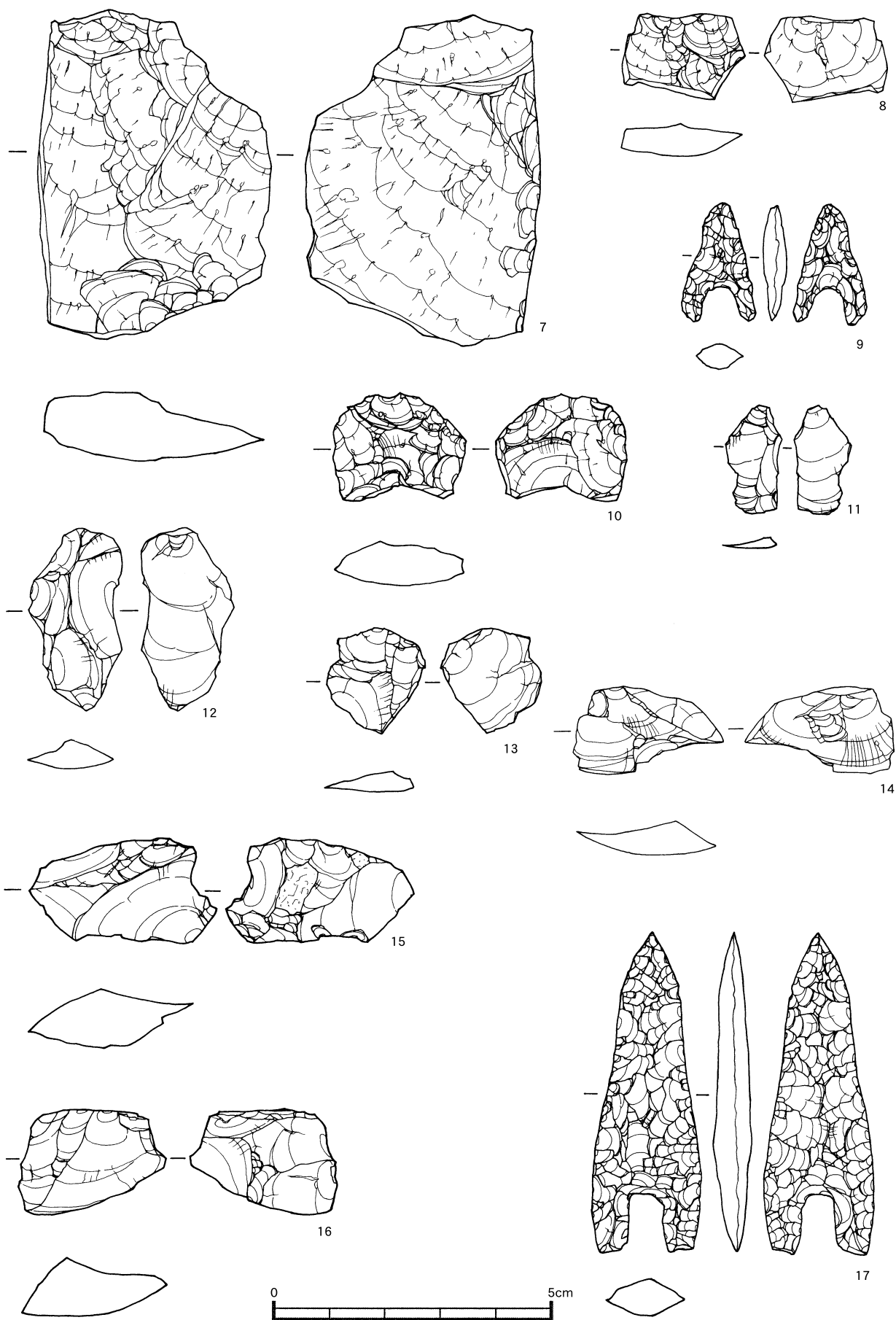
Ⅲ層黒色土中から、出土した37点の内、土器片を6点、石器・剥片類を10点、Ⅰ層黒色土中から出土した石器を1点、図化した。

1・2は、1トレンチから出土した。表面には貝殻刺突文による横位・縦位・斜位の文様と炭化物の付着があった。

3～6は、2トレンチから出土した。3は表面に横位の沈線があり、4・6は山形押型文の土器片である。



第8図 出土土器実測図



第9図 出土石器実測図

7, 8 は, 1 トレンチから出土した剥片で, 日東系黒曜石を素材としている。9 は, 打製石鏃で, 10~14 は, 2 トレンチから出土した剥片, 15・16 は 3 トレンチから出土した剥片である。17 は 11 トレンチから出土した大型石鏃で石材はチャートである。

第 3 表 土器観察表

挿図 番号	図 番号	器種	型式	出土区・層	調整・文様		色調		胎土	注記 番号	備考
					外	内	外	内			
8	1	深鉢	下剥峰式	1T・III	貝殻腹縁刺突	ナデ	灰黄	にぶい黄橙	長石, 金雲母, 砂礫	4	炭化物付着
	2	深鉢	下剥峰式	1T・III	貝殻腹縁刺突	ナデ	灰黄	にぶい黄橙	長石, 金雲母, 砂礫	1, 6	炭化物付着
	3	深鉢	塞ノ神式	2T・III	沈線	ナデ	赤褐	赤褐	長石, 角尖石, 雲母, 砂礫	11	
	4	深鉢	押型文	2T・III	山形押型文	ナデ	赤褐	赤褐	長石, 石英, 角尖石, 砂礫	3	
	5	深鉢	押型文	2T・III	山形押型文	ナデ	にぶい黄橙	赤褐	長石, 石英, 角尖石, 砂礫	3	
	6	深鉢	不明	2T・III	条線	ナデ	にぶい黄橙	赤褐	長石, 石英, 砂礫	6, 13	

第 4 表 石器計測表

挿図 番号	図 番号	器種	出土区・層	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	注記 番号	備考
9	7	剥片	1 T・III	黒曜石 (日東)	5.9	4.2	1.3	30.1	5	
	8	剥片	1 T・III	黒曜石 (日東)	1.5	2.2	0.6	1.9	12	
	9	打製石鏃	2 T・III	黒曜石	2.2	1.4	0.4	0.7	20	
	10	二次加工剥片	2 T・III	黒曜石 (日東)	2.0	2.4	0.8	3.6	19	
	11	剥片	2 T・III	チャート	1.9	1.0	0.2	0.3	24	
	12	剥片	2 T・III	チャート	3.3	1.7	0.5	2.4	2	
	13	剥片	2 T・III	チャート	1.9	1.8	0.4	0.9	7	
	14	剥片	3 T・III	黒曜石 (桑ノ木津留)	1.6	2.7	0.6	1.4	2	
	15	剥片	3 T・III	ギョクズイ	1.8	3.4	1.1	5.3	4	
	16	剥片	3 T・III	ギョクズイ	1.8	2.7	1.0	5.2	5	
	17	打製石鏃	11T・I	チャート	5.8	2.0	0.7	6.2	1	

【注】本稿は, 国道267号線道路改築に伴う埋蔵文化財調査概要報告書 『一陣之尾城跡』(2005 大口市教育委員会) をもとにまとめた。

第Ⅳ章 本調査の概要と成果

第１節 発掘調査の方法

１ 調査範囲及びグリッド設定

確認調査での成果を基に、調査範囲を約700㎡と設定した。事業区域内の工事用センター杭２点を結ぶ線を基準に10m×10mのグリッドを設定し、北から南へA～F区、西から東へ１～７区の記号・番号を付けた（第11図）。

確認調査の結果、縄文時代までの遺物包含層が確認されていたため、表土を重機で除去した後、Ⅱ層～Ⅴ層までを人力で掘り下げた。ただし、包含層が確認されなかった部分や無遺物層については、重機を使用して掘り下げを行った。

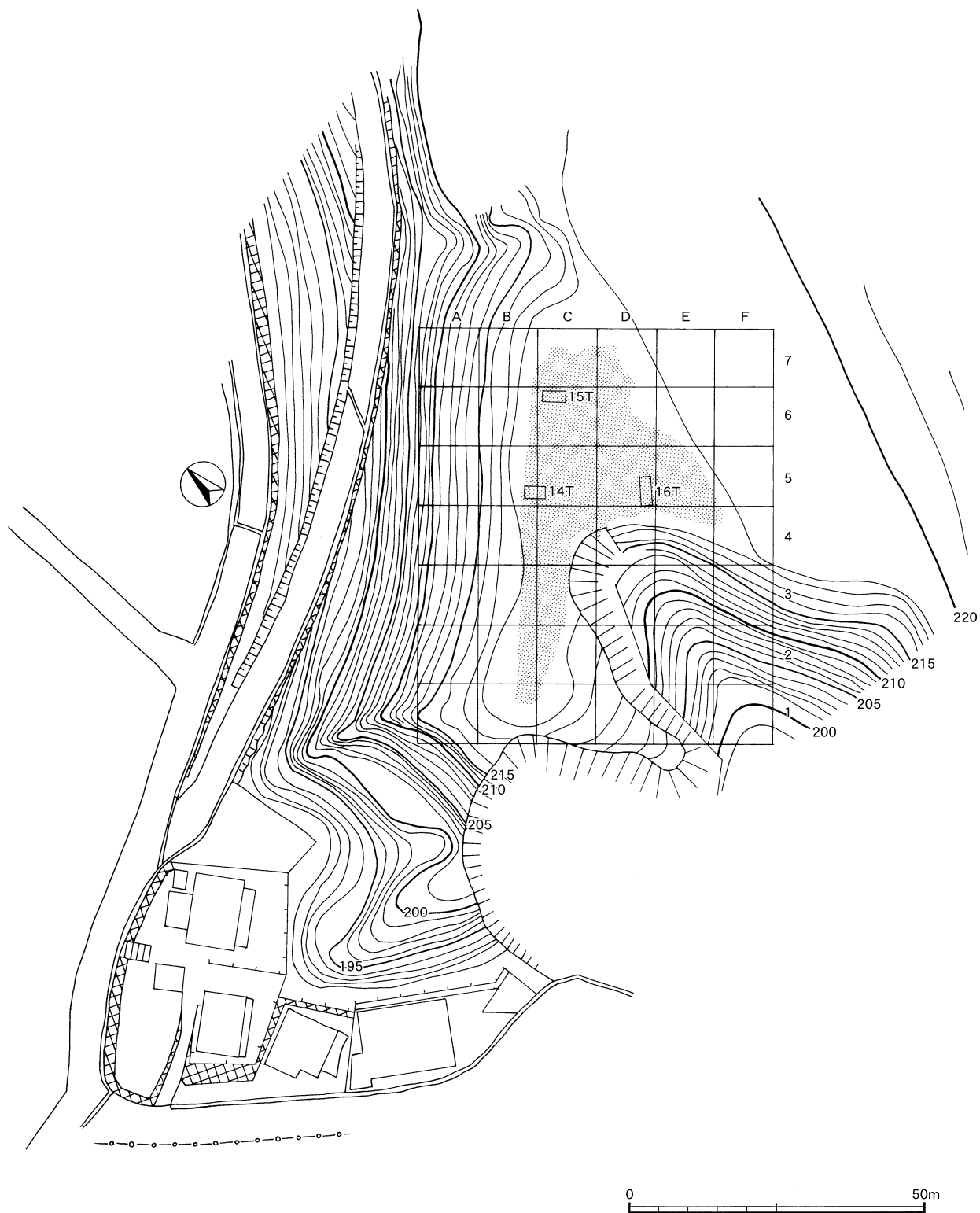
検出された遺構については、移植ゴテなどを用いて丁寧に掘り下げた後、写真撮影と実測を行った。また、出土した遺物は、写真撮影や、位置を記録した後、取り上げを行った。

２ 遺跡の層位（第10図）

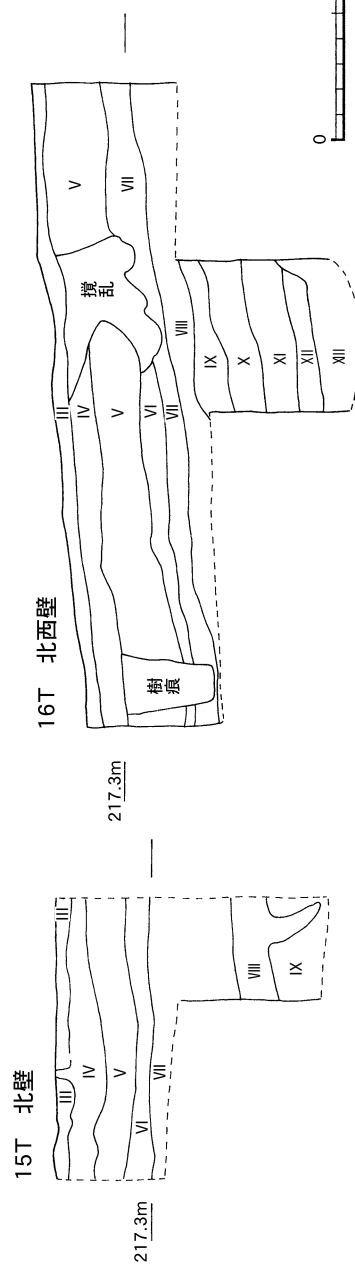
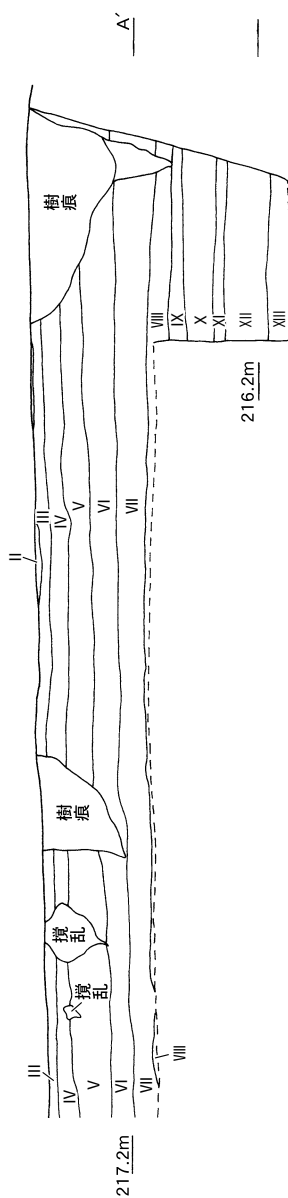
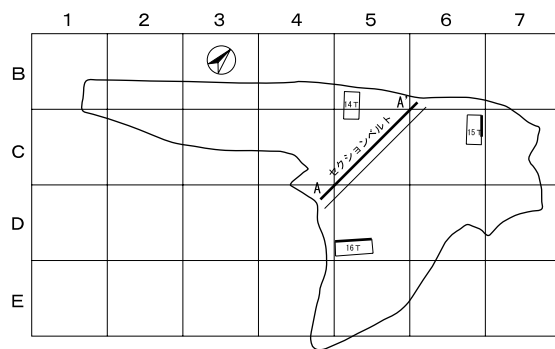
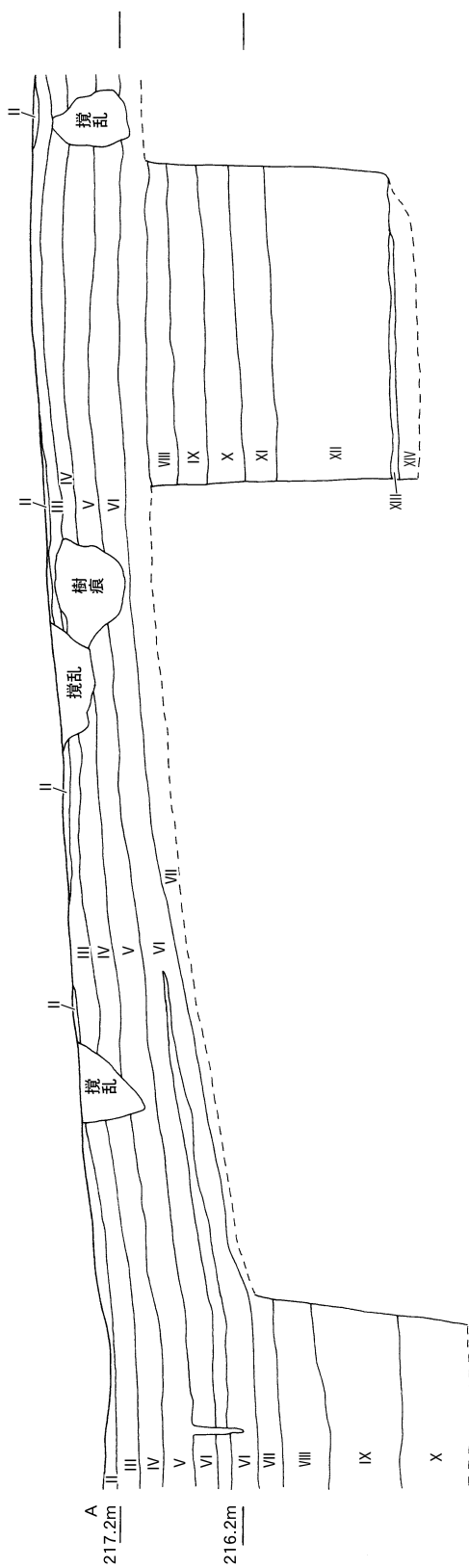
基本層序は以下のとおりである。

I層 灰黒褐色シルト	表土（現耕作土）
Ⅱ層 黒色シルト	
Ⅲ層 黄橙色軽石混じり土	鬼界カルデラ起源の火山灰（通称アカホヤ）の二次堆積物 縄文時代前期～後期（約6,000年～3,000年）の遺物包含層
Ⅳ層 暗黒褐色土	縄文時代早期の遺物包含層
Ⅴ層 暗オリーブ色土	縄文時代早期の遺物包含層
Ⅵ層 黒褐色硬質土	
Ⅶ層 にぶい黄橙色粘土	
Ⅷ層 にぶい褐色シルト	
Ⅸ層 にぶい黄褐色粘土	
X層 にぶい黄褐色シルト	
XI層 黄褐色粘土	
XII層 灰白色砂礫土	
XIII層 黄橙色シルト	
XIV層 灰白色土	約25,000年前の始良カルデラの火山活動による堆積物（シラス）

第10図 基本層序



第11図 調査範囲と周辺の地形



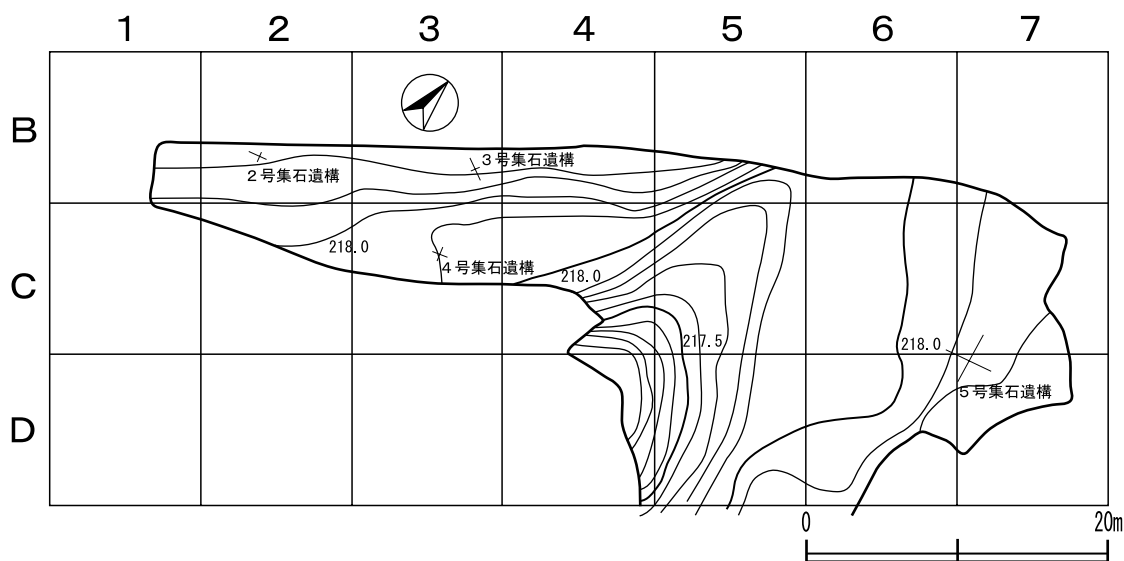
第12図 土層断面図

第2節 縄文時代の調査

縄文時代早期の遺構・遺物が発見された。遺構は、集石が4基検出された。4基とも検出面はIV層である。遺物は、土器・耳栓・石器が出土した。遺物は、III・IV層から出土している。

1 集石遺構（第13図）

集石は、確認調査で、2基検出されていたため、1・2号とし、本調査で検出された4基を3～6号とした。なお、1号集石については、確認調査の項で報告済である。



第13図 集石遺構配置図

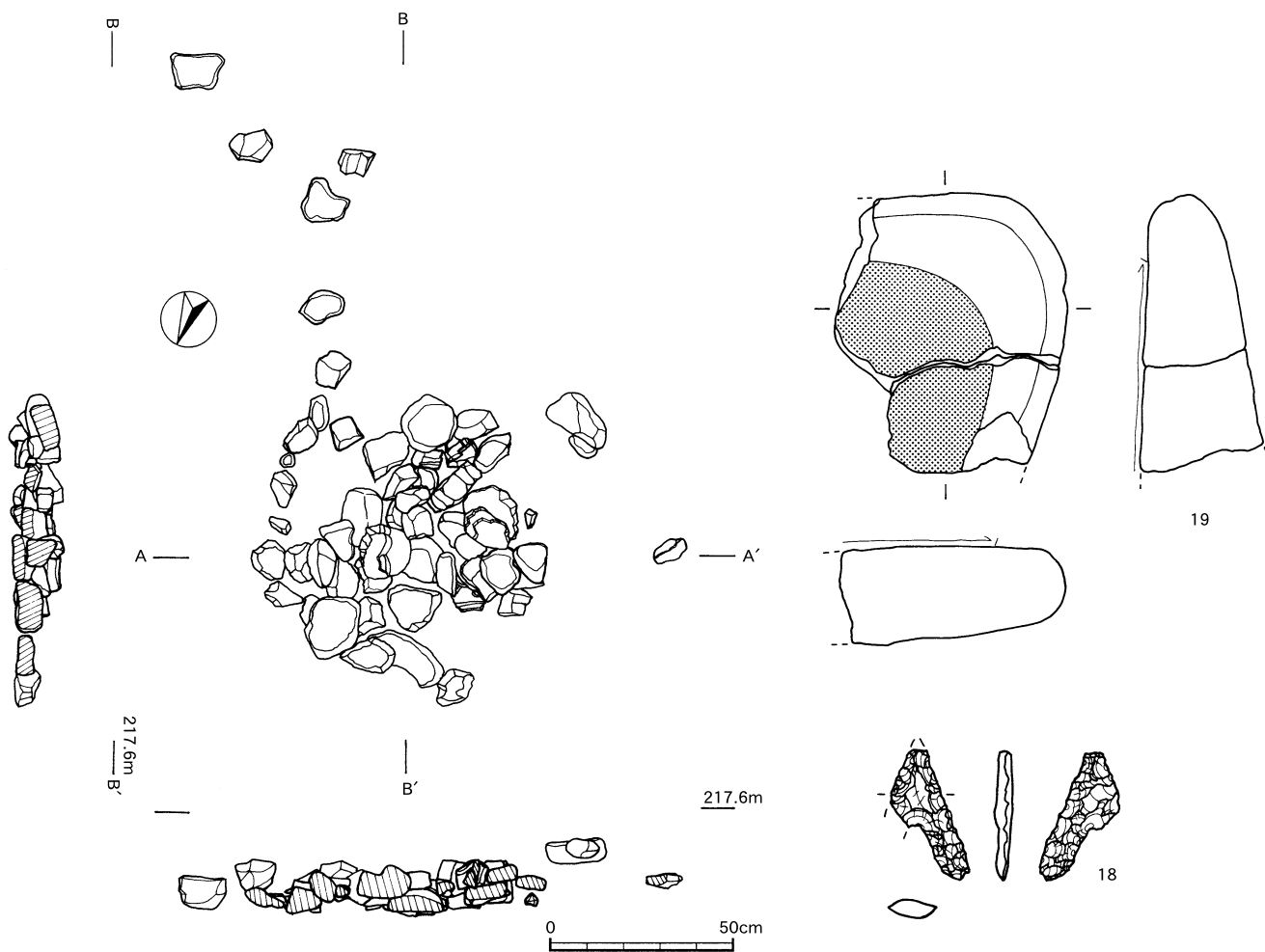
(1) 2号集石（第5表，第14～16図）

B-2区のIV層で検出された。確認調査の際に、一部が2トレンチ北側壁面に露出した状態で検出されていたため、本調査で完掘することとなった。60個の礫が200cm×150cmの範囲から検出されたが、集石遺構に伴う掘り込み遺構は確認できず、構成礫に10cm～15cmに細片化した石皿が多用される特徴が特記できる。使用石材は安山岩で、表面の一部は、赤色を呈しているが、被熱に起因するか明らかにできない。遺構内からは、打製石鏃が1点と石皿が9点出土した。

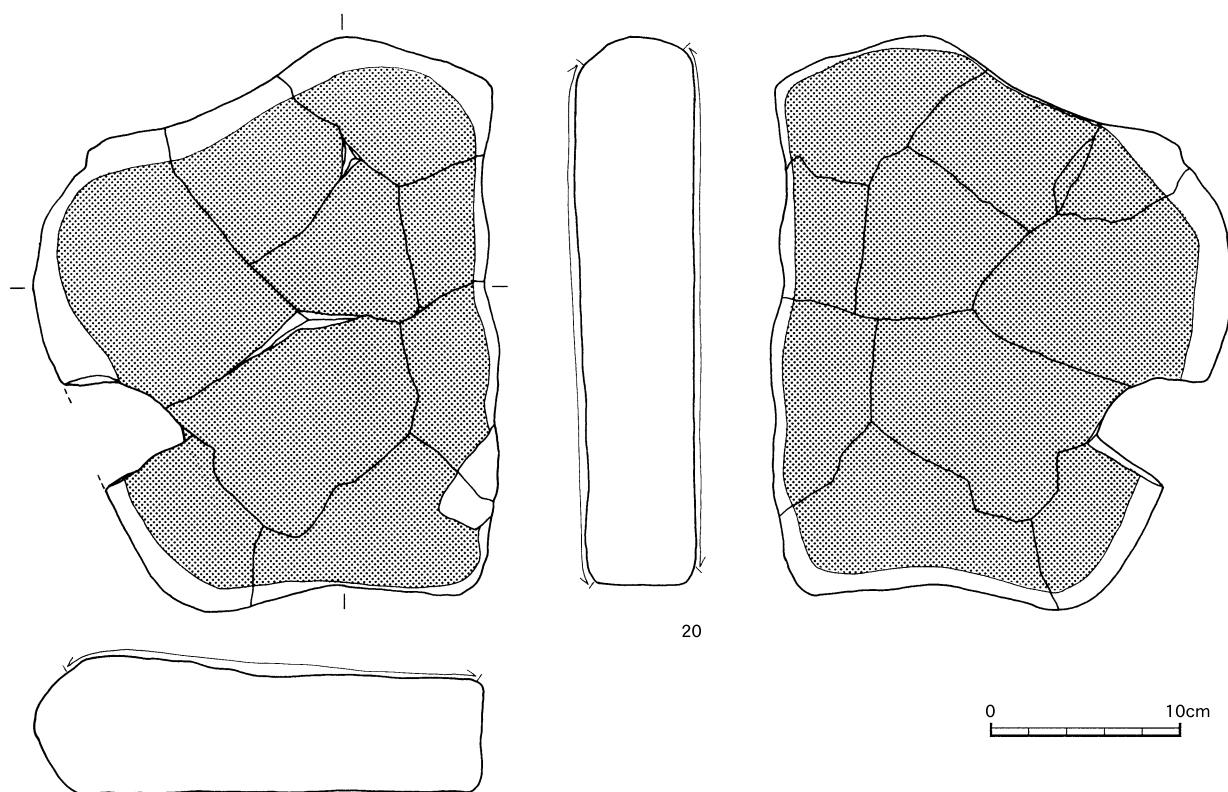
19は、安山岩2点が接合したもので、表面は若干窪み平滑な磨面が残ることから、石皿の再利用と判断できる。裏面とも被熱によるものと思われる赤化が認められた。

20は、9点の石皿片が接合したもので、30.2cm×24.7cmに復元される。本遺跡から出土した石皿の中では大きさ・重さとも最大である。接合した9点の中の1点は、B-2区のIV層から出土した石皿の破片である。2号集石とは約5m離れている。なお、接合した8点は集石遺構の構成礫である。両面に緩やかに窪む摩耗面が残される。なお、明確な被熱痕跡は確認されない。

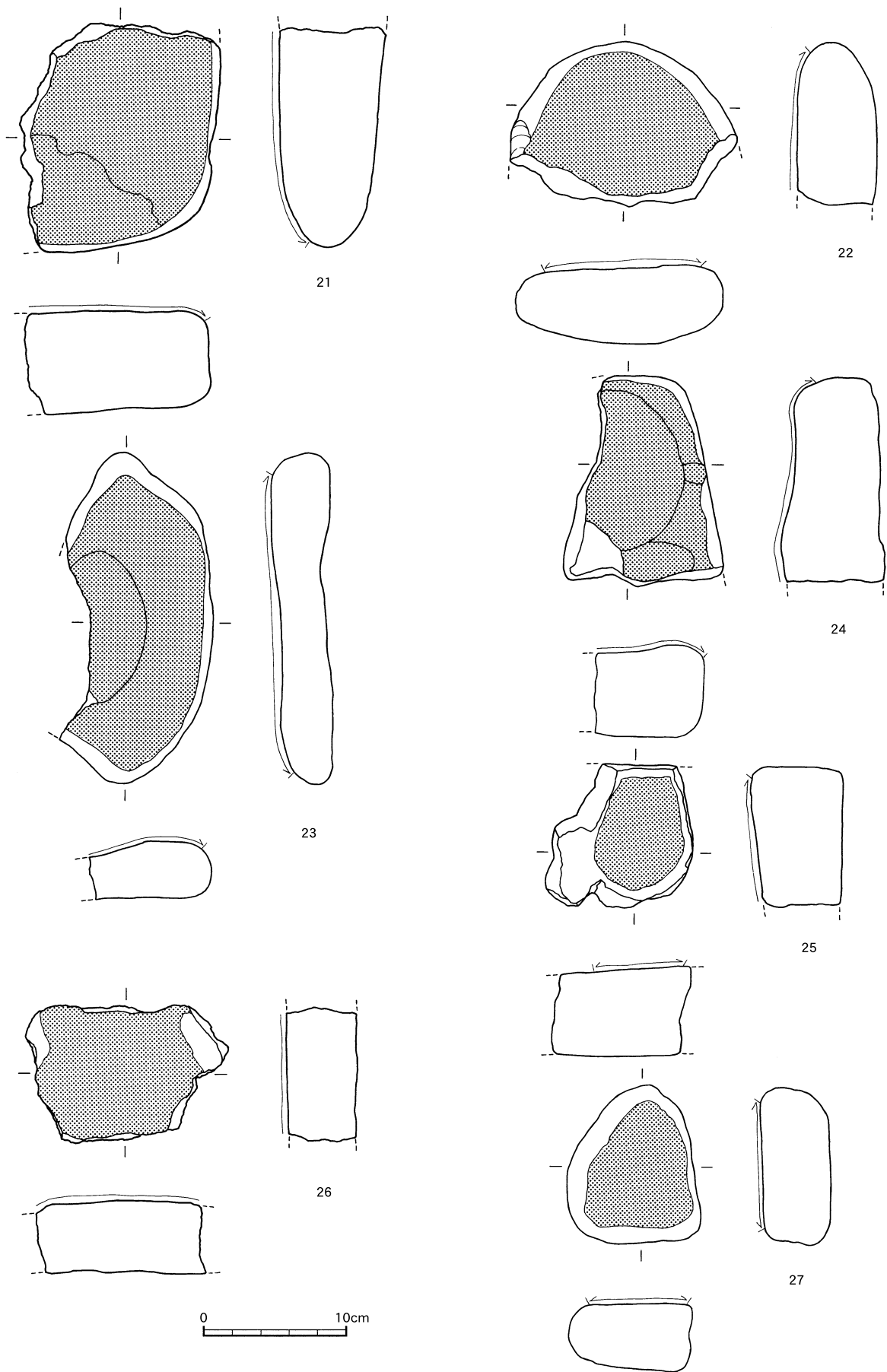
21～27は、構成礫の中で摩耗面が確認できたもので、石皿の一部を構成していたと見られる。表裏面とも被熱によるものと思われる赤化が認められた。磨面は表面のみに認められるが、21～24は使用痕が不明確で、25～27は使用痕が明確である。



第14図 2号集石遺構実測図



第15図 2号集石遺構内遺物（石皿）実測図(1)



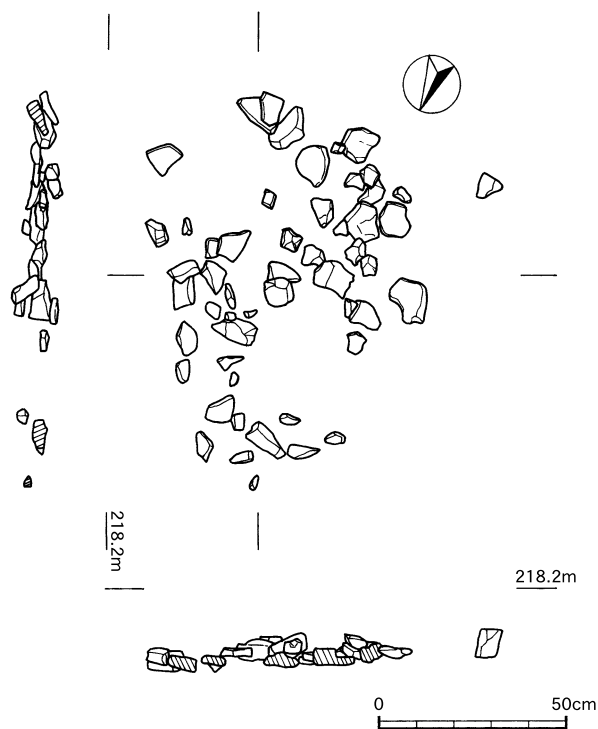
第16図 2号集石遺構内遺物（石皿）実測図(2)

(2) 3号集石(第17図)

B-3区のIV層で検出したもので、240cm×250cmの広範囲に37点が散在して確認された。5～10cm程の破碎礫が主体で、一部は被熱の可能性もある。なお、安山岩で構成するが、範囲内及び周辺に掘り込み遺構等は確認できていない。



第17図 3号集石遺構実測図



第18図 4号集石遺構実測図

(3) 4号集石（第18図）

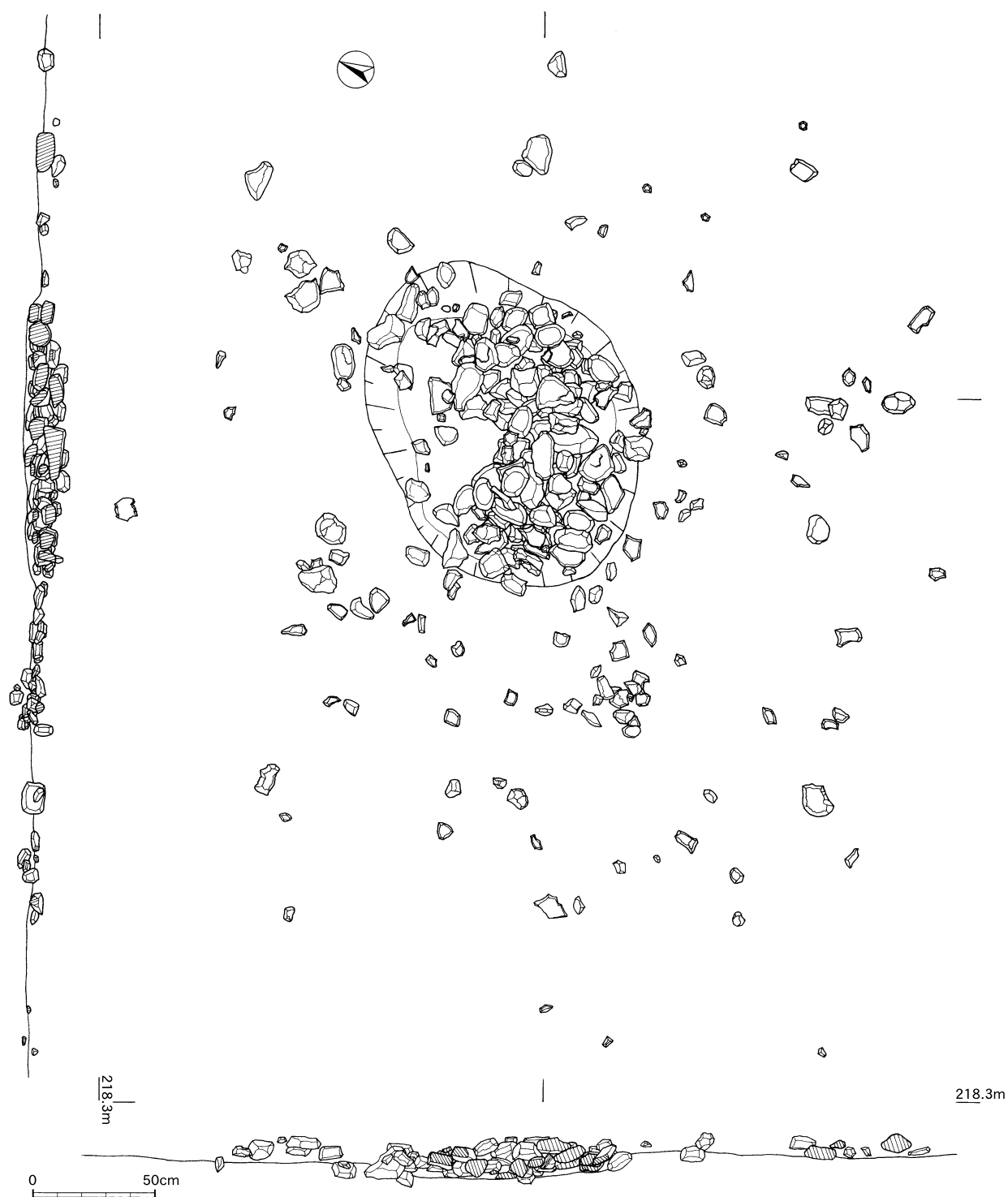
C－3区，IV層で検出したもので，直径110cm程の範囲に礫53点を検出している。53点は破碎した安山岩の扁平礫で構成し，周辺を含めて掘り込み遺構は存在しない。

第5表 2号集石遺構内遺物（石皿）計測表

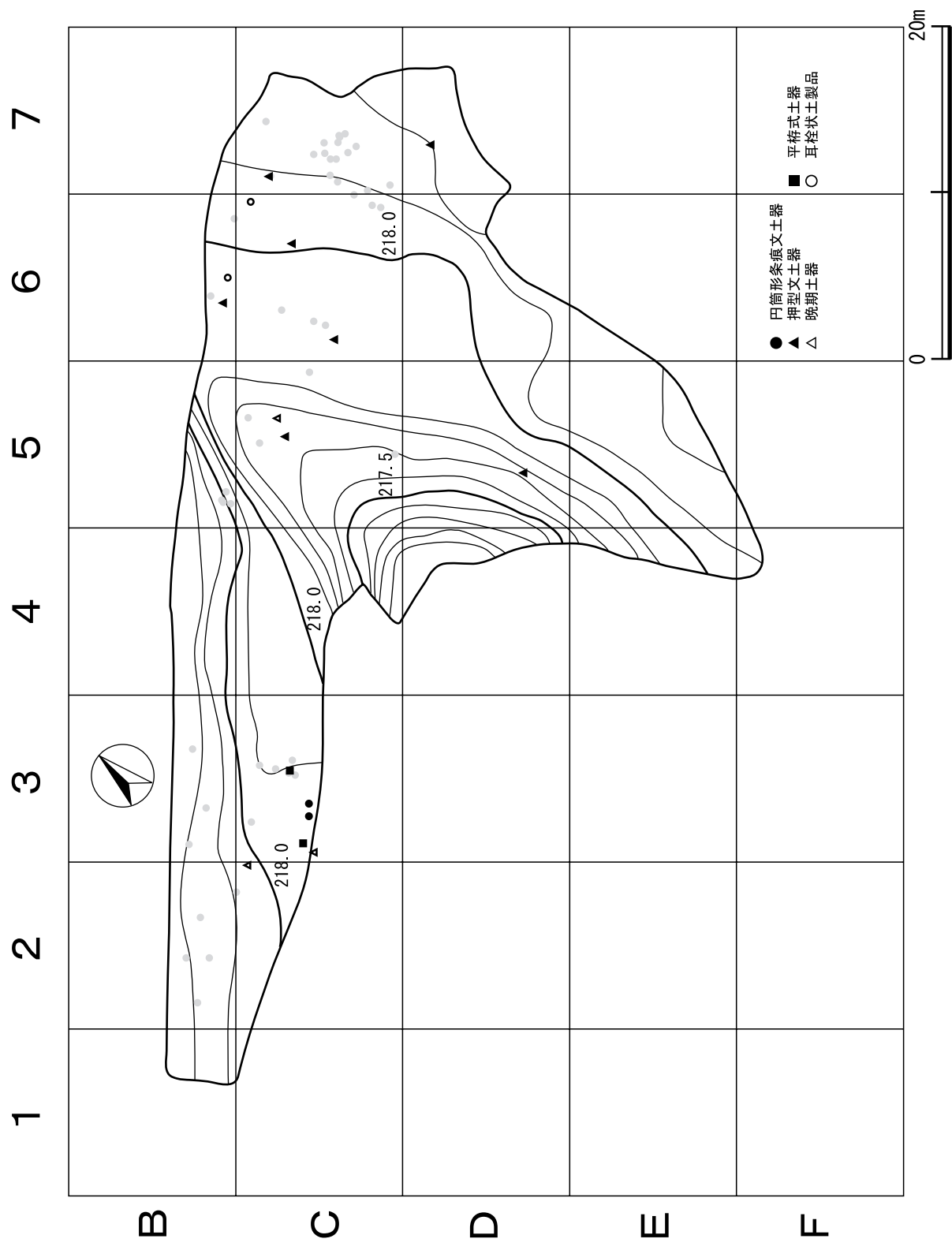
挿図 番号	図 番号	器種	出土区・層	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	注記 番号	備考
16	18	石鉢	B-2・IV	ギョクズイ	1.75	1.1	0.25	0.27	574	
	19	石皿	B-2・IV	安山岩	15.3	12.8	6.75	1670	2号集石19, 47	磨面が不明確
	20	石皿	B-2・IV	安山岩	30.20	24.70	7.2	8400	827, 2号集石 15, 18, 36, 37, 39, 45, 46, 52	磨面が明確
	21	石皿	B-2・IV	安山岩	15.8	14	8.2	2660	2号集石54	磨面が不明確
	22	石皿	B-2・IV	安山岩	11.5	15.9	5.5	1310	2号集石22	磨面が不明確
	23	石皿	B-2・IV	安山岩	22.95	10.7	4	1500	2号集石17	磨面が不明確
	24	石皿	B-2・IV	安山岩	14.5	11.2	7.3	1640	2号集石48	磨面が不明確
	25	石皿	B-2・IV	安山岩	10	10.2	6.45	1010	2号集石55	磨面が明確
	26	石皿	B-2・IV	安山岩	9.4	14.2	5	1007	2号集石16	磨面が明確
	27	石皿	B-2・IV	安山岩	10.80	9.40	4.90	780.00	2号集石28	磨面が明確

(4) 5号集石 (第19図)

C・D-6・7区IV層で検出した集石遺構で、礫256点で構成する。256点の礫は、長径140cm×短径100cm程の浅い皿状の掘り込み遺構を中心に、350cm×450cmの広範囲に認められている。構成礫は安山岩で、一部赤化していることから、被熱の可能性も考えられる。なお、掘り込み遺構では炭化物が検出されている。



第19図 5号集石遺構実測図



第20図 縄文土器・耳栓状土製品出土分布図

2 土器（第6表、第20・22図）

Ⅲ・Ⅳ層から出土したが、出土総数が少なく実測可能なものを全て掲載した。

(1) Ⅰ類土器（28・29）円筒形条痕文土器

28の口唇部は、丸く収められ、口唇部直下から口縁部に横位の貝殻刺突線文が密に施文される。なお、胎土には、角閃石の混入が目立つ。

29は、口唇部を欠き、28より器壁は厚いが、他の特徴は共通する。なお、外面には、炭化物の付着が確認できる。

(2) Ⅱ類土器（30～36）押型文土器

30は、大きく外反する口縁部で、外面の小粒の楕円押型は斜方向に回転施している。外面は、灰黄色であるが、一部は茶褐色である。

31～36は、山形押型文土器である。32は、胴部片で、6、7条の押型施文具痕が観察でき、横あるいは斜方向に施されている。36は、推定底径7.8cmの底部片で、内面の一部は摩滅し、端部は外へ丸く膨らんでいる。

(3) Ⅲ類土器（37～40）平栴式土器

37の口縁部施文帯は、若干の膨らみを成し、狭い口唇部の平坦面には、連続した刻みが施される。また、内面及び施文帯は、丁寧にナデられ、口唇部に平行する4条の浅い平行沈線文を施し、赤色塗彩が認められる。

38の内面整形は、特に入念に行い、頸部屈曲部に6mm程の刻目突帯文を巡らし、その下位には結節縄文を施している。

37・38とも胎土に角閃石を多量に含み、硬質な仕上がりを呈している。

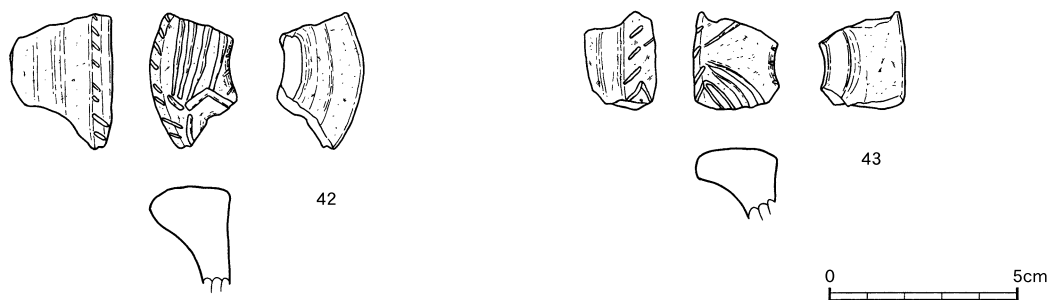
39・40には、施文が見られないことから、無施文土器ないしは粗製土器と見られる。

(4) 底部（41）

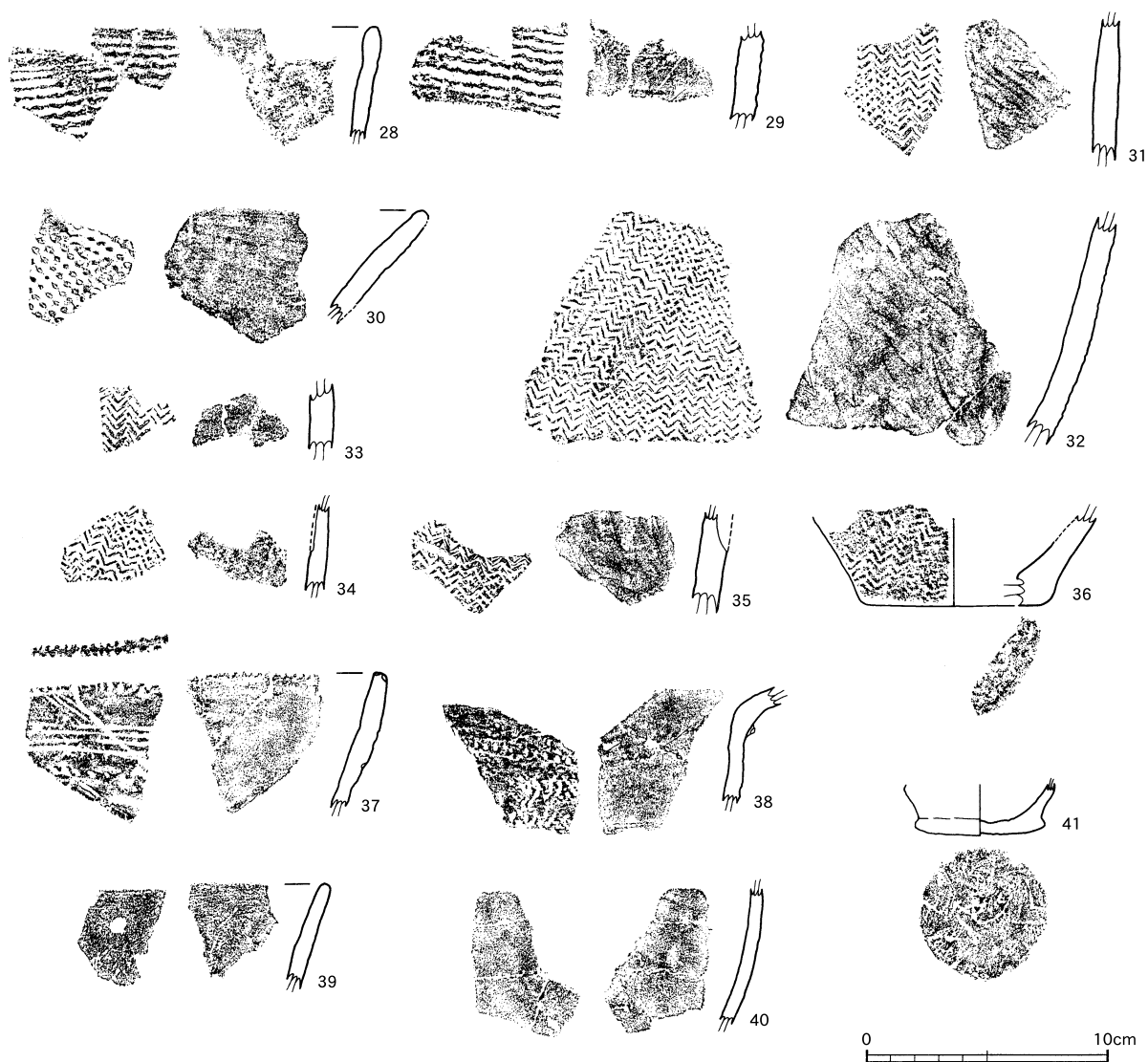
41は、5.4cmの復元径で、円盤状の粘土帯を貼り付け接地面を作り出している。なお、帰属の詳細は明らかでない。

(5) 耳栓状土製品（土製耳飾り）（第21図）

42・43共にⅣ層上面で出土し、いずれも類似し焼成・色調・胎土が観察でき、直接接合していないが同一固体の可能性が高い。2点とも天地は明らかでないが、中心部が中空の滑車形が想定できる。図示した42の外径は8.0cm程が復元され、上面の平坦面の外周端部と内側端部はヘラ状工具で



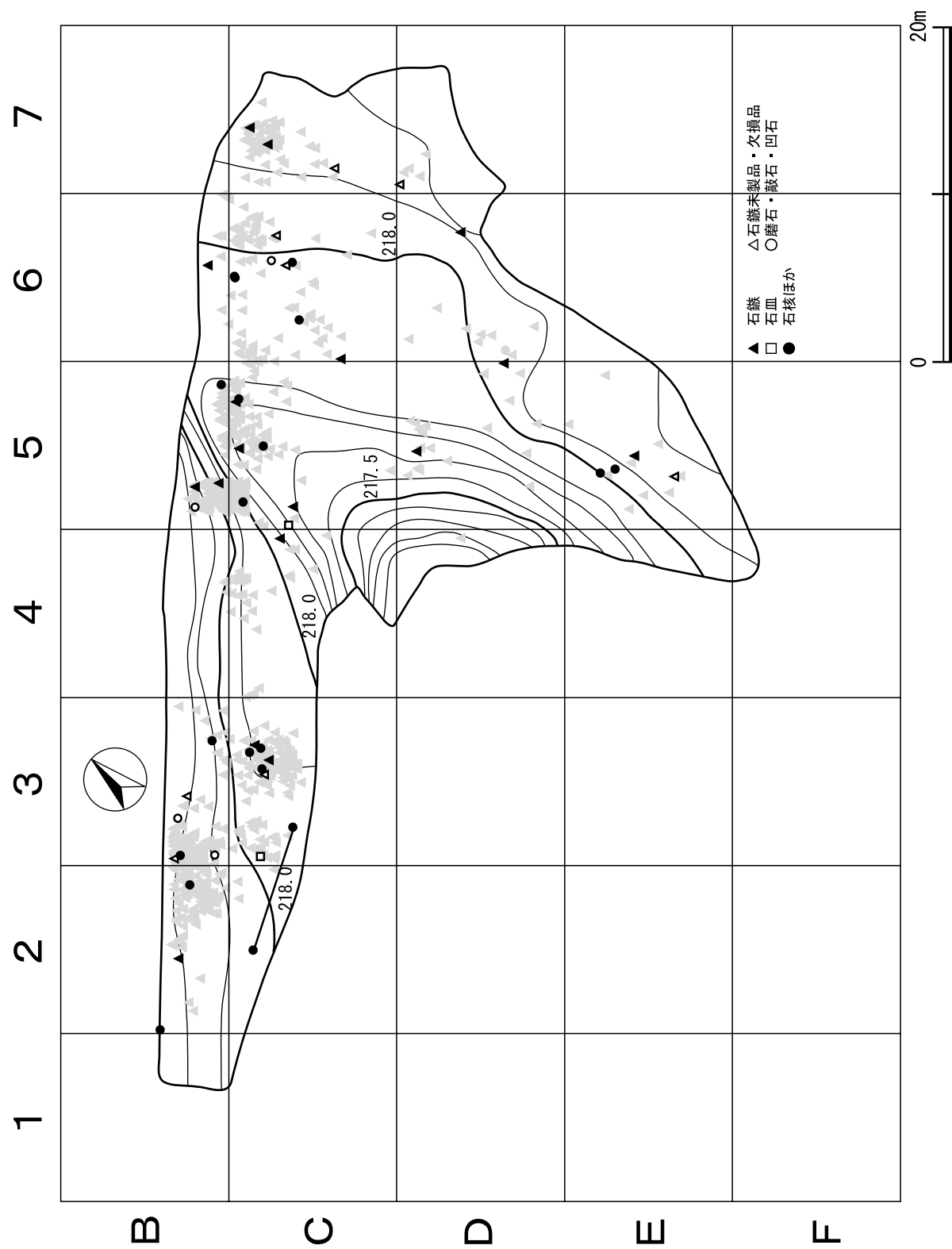
第21図 耳栓状土製品実測図



第22図 縄文土器実測図

第6表 土器観察表

挿図 番号	図 番号	型式	出土区・層	調整・文様		色調		胎土	注記 番号	備考
				外	内	外	内			
21	28	円筒形条痕文	C-3・IV	貝押引（横）	ナデ	にぶい黄	にぶい黄	長石，石英，黒雲母，角閃石，砂礫	528・529	
	29	円筒形条痕文	C-3・IV	貝押引（横）	ナデ	オリーブ黒	オリーブ黒	長石，石英，角閃石，砂礫	527・772	炭化物付着
	30	押型文	C-7・攪乱	楕円押型	丁寧なナデ	灰黄	浅黄	長石，石英，角閃石，砂礫	1036	
	31	押型文	15T・IV	山形押型	丁寧なナデ	にぶい黄橙	にぶい黄	長石，石英，赤色粒，砂礫	219	
	32	押型文	C-5・IV	山形押型	丁寧なナデ	明黄褐	にぶい黄褐	長石，石英，黒雲母，赤色粒，砂礫	987	
	33	押型文	D-7・IV	山形押型	ナデ	明黄褐	にぶい黄橙	長石，石英，赤色粒，砂礫	1042	炭化物付着
	34	押型文	16T・IV	山形押型	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄褐	長石，石英，黒雲母，砂礫	97	
	35	押型文	B-6・攪乱	山形押型	丁寧なナデ	にぶい黄橙	オリーブ褐	長石，石英，黒雲母，砂礫	1024	炭化物付着
	36	押型文	C-6・IV	山形押型	摩滅により不明	橙	にぶい黄	長石，石英，砂礫	369	推定底径 7.8cm
	37	平栴式	C-3・IV	刻目，刺突連点，沈線	丁寧なナデ	にぶい黄	黒褐	長石，石英，黒雲母，砂礫	563	朱塗り
	38	平栴式	C-3・IV	刻目突帯，縄文施文	丁寧なナデ	黄褐	黒褐	長石，角閃石，砂礫	63	
	39	深鉢	C-5・III	ナデ	ナデ	明黄褐	橙	長石，石英	984	
	40	深鉢	C-2・IV	丁寧なナデ	ナデ	明赤褐	明赤褐	長石，石英，黒雲母，赤色粒	664・665	
	41	中鉢	C-3・IV	ナデ	ナデ	黄褐	明黄褐	長石	569	推定底径 5.4cm



第23図 縄文石器出土状況

斜めに浅く刻まれ、平坦面には外周に集約する弧状の複数の沈線文が浅く施されている。なお、3.5cm～4.0cm程の器高（厚さ）が想定される。

3 石器（第7～9表、第23図～28図）

Ⅲ層から1点、Ⅳ層から44点、Ⅴ層から6点の、計51点出土した。石鏃（未製品・欠損品を含む）が25点と最も多い。以下に、各器種の詳細を述べる。

(1) 石鏃（第7表、第24・25図）

形態からⅠ・Ⅱ類の二つに分類し、出土した全てを掲載した。

ア Ⅰ類（第24図44～53）

全体の形状が正三角形（長幅比＝1.3：1未満とした）を呈するものである。

44～53は、基部に挟りがみられるものである。中でも、46～53は挟りが深い。また、52・53は脚部が幅広で鋏形を呈している。

イ Ⅱ類（第24図 54～58）

全体の形状が二等辺三角形（長幅比＝1.3：1以上とした）を呈するものである。先端は鋭く作ったものが多い。

55は、中央部から基部にかけて欠損している。56・57は、挟りが深い。54の頭部近くと基部近くとは段となり、多角形状を呈する。

ウ その他（第25図 59～67）

59～61、65～67は、欠損のため上記の分類に含めることができなかったもので、頭部を欠いたもの、脚部を欠いたもの、脚部のみのものがある。62～64は、石鏃の未製品と考えられる。

(2) 石錐（第7表、第26図 68）

先端部を、鋭く尖らせてあり、厚みのある形状から、孔をうがつためのものであると考えられる。

(3) スクレイパー（第8表、第26図 69～71）

69は、裏面からの連続した剥離によって、刃部が形成されている。使用によるものと思われる微細な剥離が観察される。裏面に一部平坦な剥離が認められる。

70は、扁平な剥片の背腹両面に二次的な加工を施し、刃部を形成している。刃部のみ残った削器の欠損品と思われる。

71は、背面に礫皮面を残す剥片を素材とし、両側縁に腹面からの急角度な二次加工を施し、刃部を形成している。一部腹面への加工も認められるため、加工痕のある剥片とも考えられる。

(4) 楔形石器（第8表、第26図 72・73）

72、73は、ともに厚手の剥片を素材としている。上下両端から使用により生じたと思われる背腹両面への剥離が認められる。レンズ状を呈す厚手の剥片の上下端に、それぞれ対向する小剥離面が認められることから楔形石器と判断した。

(5) 二次加工剥片（第8表，第26図 74～77）

剥片の一部に二次加工が認められるが，器種認定が困難なものである。剥片の縁辺端部に剥離が認められる。

(6) 微細剥離剥片（第8表，第26図 78～81）

剥片の縁辺に微細な剥離痕が認められるものである。81は厚みのある比較的大型の縦長剥片の側縁に微細な剥離痕が認められる。

(7) 剥片（第8表，第26図 82・83）

82は，B－4区から出土した黒曜石の剥片，83は，C－4区から出土したチャートの剥片である。一括として取り上げた。

(8) 石核（第8表，第27図）

84の石核素材は，分割礫で，原礫は拳大程が復元される。最終剥離は礫面が自然全打面であるが，それ以前の剥離作業は打面移動しながら先行した剥離面を打面としている。

85は，角礫から剥離された厚手の剥片を素材とし，作業面は背腹両面に設定されている。背面の打面は単設，腹面の打面は上下の両設で，背面打面と腹面打面は90°転移している。なお，背面打面のパティナが進行する特徴が指摘できる。

86は，小型の円礫から剥離した厚手の剥片の腹面を作業面としている。90°の打面転移が観察される。打面調整痕はみられない。

87は，分割礫の片方を素材とし，正面右端し（右側面上部の平坦面）に分割面が残されている。したがって，分割面を打面とし，扇状の剥片剥離を先行した後，それぞれの剥離面を打面として，現状の最終剥離に至ったと判断できる。

88も，分割礫素材と思われ，図示した正面の左側側面が，分割面に該当する。なお，最終剥離面を正面に図示しているが，この最終剥離は，分割面からの作業放棄後の周縁からの求心状剥離に相当する。

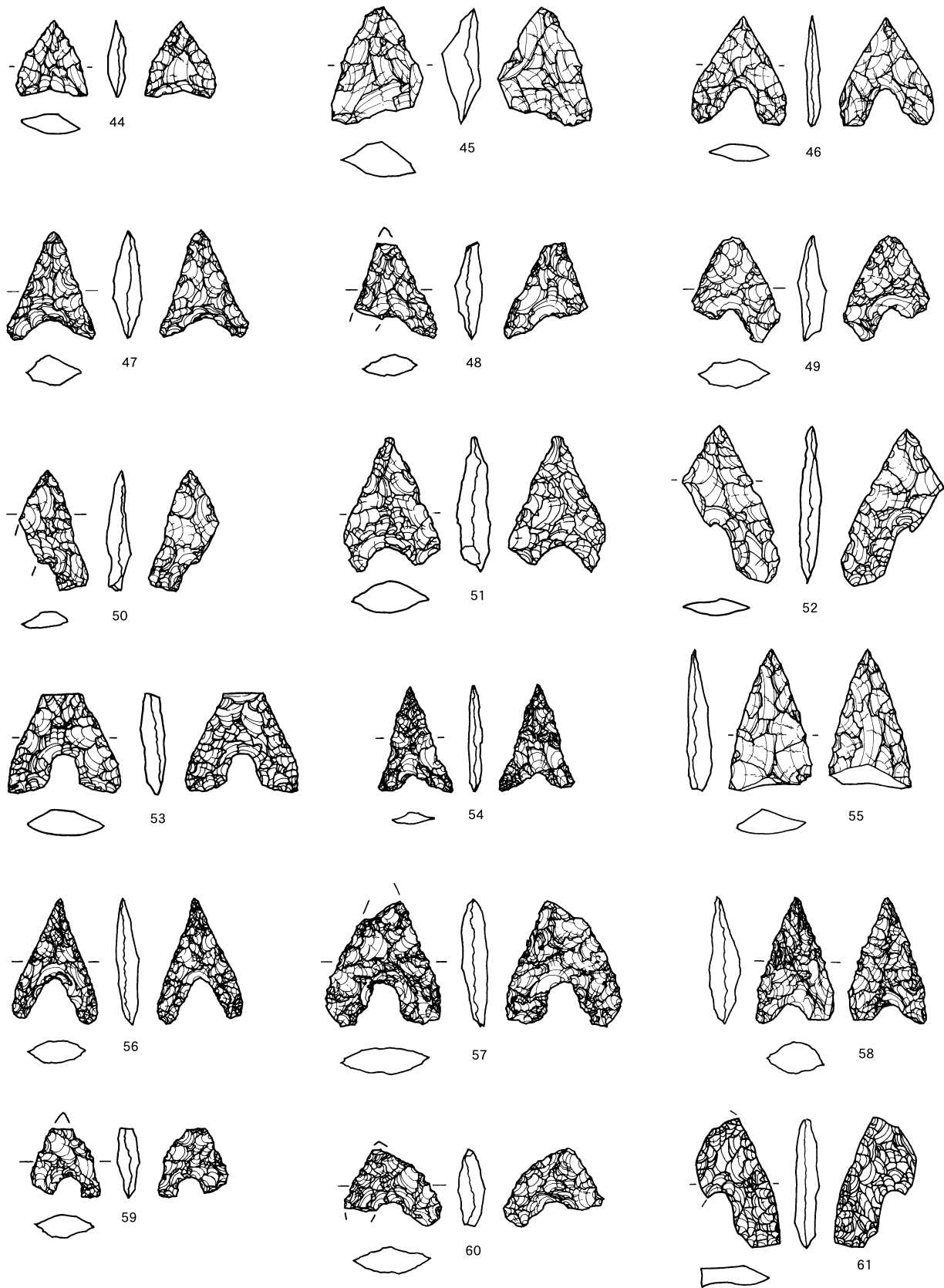
(9) 磨石・敲石・凹石・石皿（第9表，第28図）

89・91は，磨石である。89は，平面形態が不定形を呈して表・裏面に磨面をもつ。また被熱により赤化している。91は，平面形態が楕円形を呈して表・裏面に磨面をもつ。

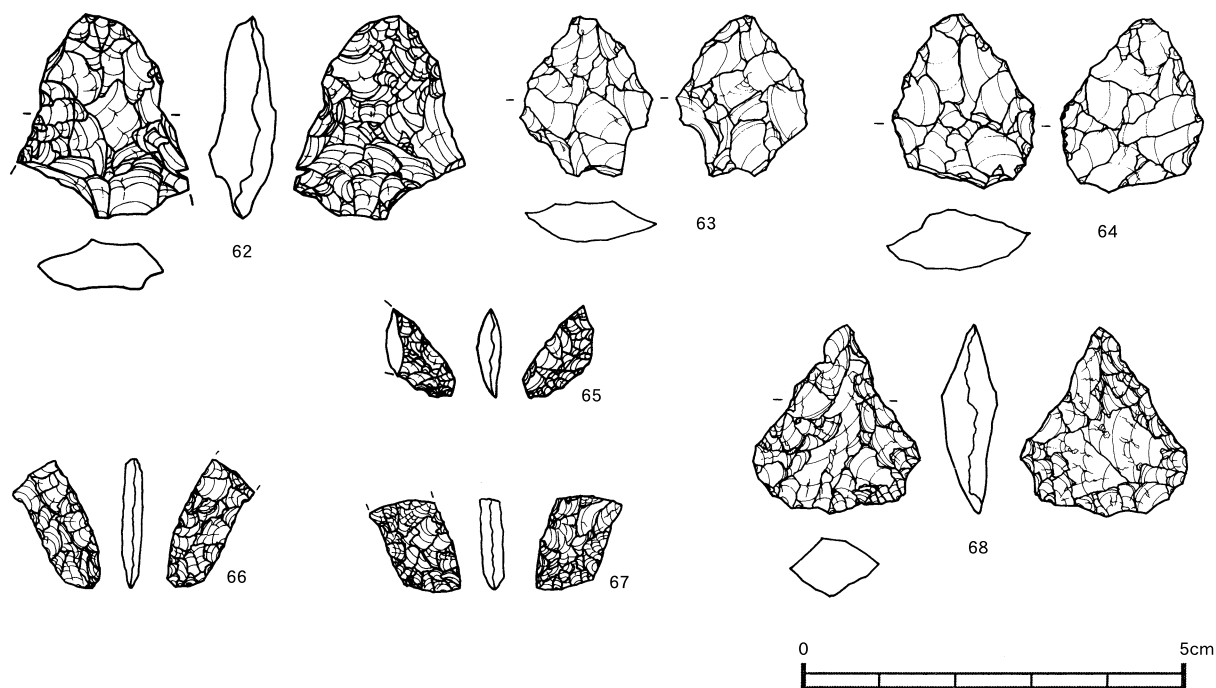
90は，表面に凹みをもつ凹石である。周縁に敲打痕が認められる。

92は，表裏平坦面が磨石，側縁部が敲石に使用されている。

93は，小型の石皿，94は，石皿片としたが，93は，浅い窪み面を形成し，砥石の可能性もある。93は，表面の磨面が不明確である。94は，表・裏面に明確な磨面をもつ。



第24図 石鏃実測図(1)



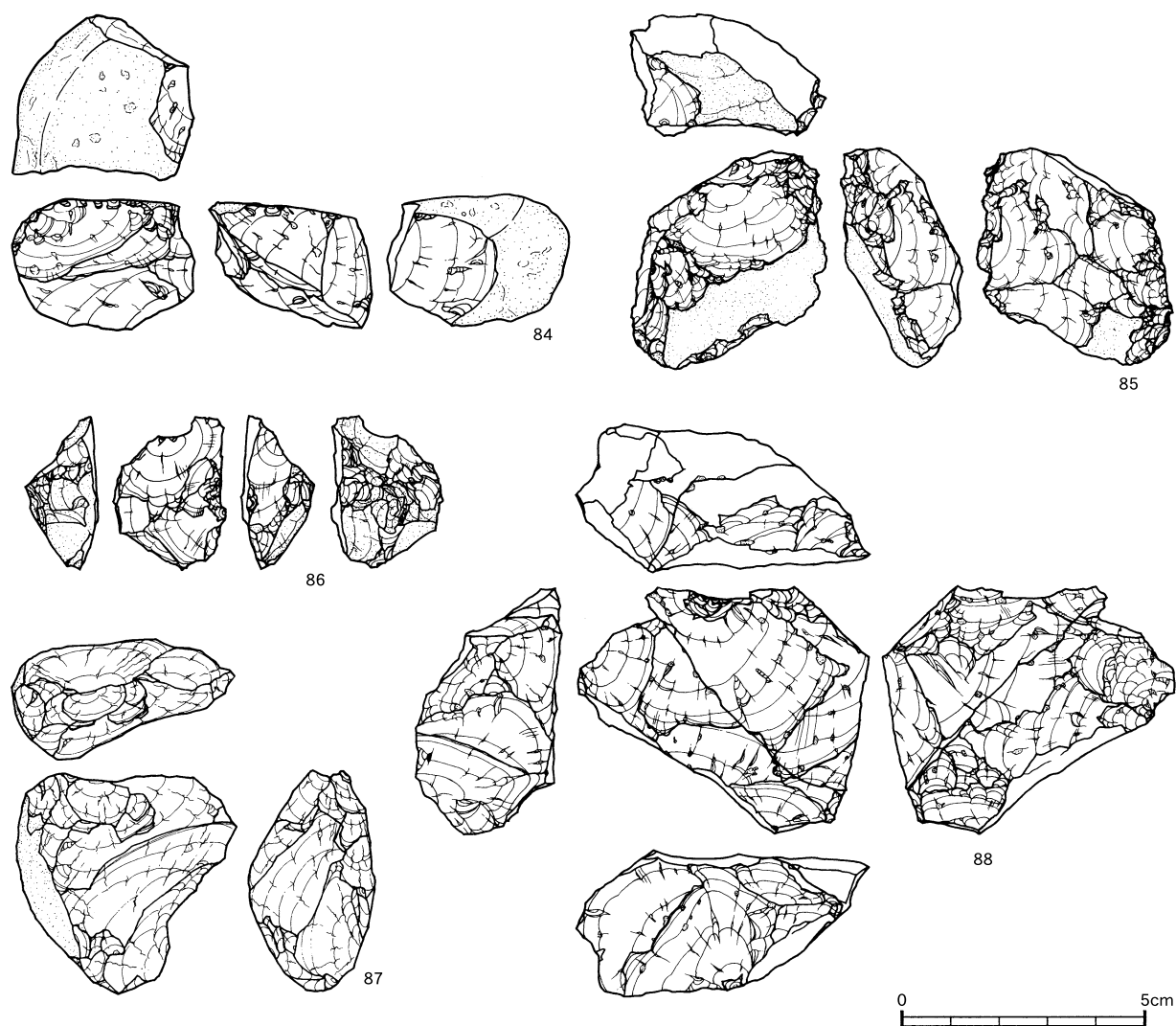
第25図 石鏃実測図(2)及び石錐実測図

第7表 石器計測表(1)

挿図 番号	図 番号	器種	出土区・層	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	注記 番号	備考
24	44	石鏃	D-6・IV	黒曜石(日東)	1.25	(1.20)	(0.30)	(0.35)	1044	
	45	石鏃	C-7・IV	頁岩	(2.00)	(1.60)	(0.65)	(1.18)	392	
	46	石鏃	C-6・IV	ギョクズイ	1.80	1.60	0.20	0.57	191	
	47	石鏃	C-3・IV	頁岩	1.80	1.50	0.50	0.74	500	
	48	石鏃	C-7・IV	チャート	(1.60)	(1.40)	(0.40)	(0.67)	262	
	49	石鏃	14T・IV	チャート	(1.70)	(1.50)	(0.50)	(0.85)	1071	
	50	石鏃	C-5・IV	チャート	(2.00)	(1.15)	(0.40)	(0.61)	993	
	51	石鏃	B-6・IV	黒曜石(日東)	(2.30)	(1.65)	(0.55)	(1.27)	1016	
	52	石鏃	C-4・IV	ギョクズイ	(2.65)	(1.70)	(0.35)	(1.00)	1165	
	53	石鏃	14T・IV	チャート	(1.70)	1.90	(0.40)	(1.06)	23	
	54	石鏃	D-5・IV	チャート	1.70	1.30	0.20	0.27	87	
	55	石鏃	C-4・IV	頁岩	(2.35)	(1.40)	(0.40)	(1.11)	975	
	56	石鏃	E-5・IV	チャート	2.12	1.40	0.40	0.64	1154	
	57	石鏃	C-5・IV	黒曜石(五女木)	(2.10)	(1.90)	(0.47)	(1.33)	946	
	58	石鏃	C-3・IV	チャート	(2.15)	(1.30)	(0.50)	(1.03)	1188	
	59	石鏃欠損品	15T・IV	黒曜石(桑ノ木津留)	(1.15)	(1.20)	(0.40)	(0.42)	223	
	60	石鏃欠損品	E-5・IV	黒曜石(日東)	(1.25)	(1.65)	(0.40)	(0.64)	1148	
	61	石鏃欠損品	D-7・IV	チャート	(2.20)	(1.40)	(0.35)	(0.94)	1038	
25	62	石鏃未製品	B-3・IV	黒曜石(日東)	(2.65)	(2.20)	(0.85)	(3.27)	67	
	63	石鏃未製品	C-4・IV	黒曜石(日東)	(2.10)	(1.70)	(0.50)	(1.59)	一括	
	64	石鏃未製品	C-5・IV	チャート	(2.30)	(1.80)	(0.80)	(2.97)	一括	
	65	石鏃欠損品	C-7・IV	チャート	(1.20)	(1.10)	(0.25)	(0.40)	204	
	66	石鏃欠損品	C-3・IV	チャート	(1.15)	(0.90)	(0.30)	(0.21)	447	
	67	石鏃欠損品	C-6・IV	頁岩	(1.65)	(0.65)	(0.20)	(0.32)	171	
	68	石錐	D-5・IV	黒曜石(日東)	2.40	2.20	0.70	2.68	102	



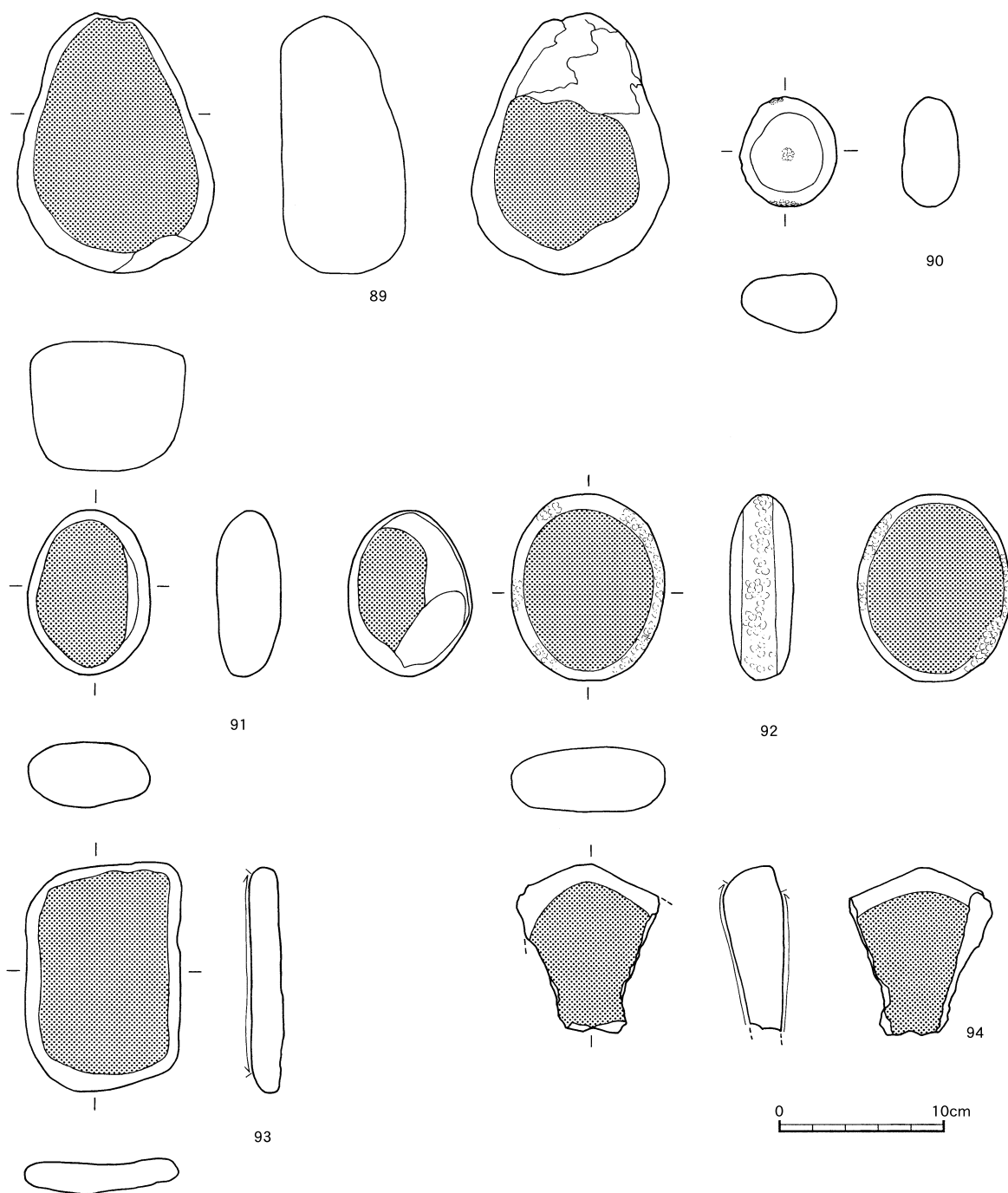
第26図 スクレイパーほか実測図



第27図 石核実測図

第8表 石器計測表(2)

挿図 番号	図 番号	器種	出土区・層	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	注記 番号	備考
26	69	スクレイパー	C-5・V	硬質頁岩	(2.90)	(3.10)	(1.10)	(10.44)	979	
	70	スクレイパー	C-6・V	頁岩	(3.00)	(4.30)	(0.30)	(3.15)	1026	
	71	スクレイパー	B-5・IV	黒曜石(桑ノ木津留)	(1.20)	(2.80)	(0.70)	(1.65)	1137	
	72	楔形石器	B-3・IV	黒曜石(日東)	2.40	2.10	1.10	5.47	1176	
	73	楔形石器	C-6・V	黒曜石(日東)	(2.50)	(2.20)	(1.30)	(6.59)	1033	
	74	二次加工剥片	E-5・IV	黒曜石(日東)	(4.50)	(1.90)	(1.90)	(12.95)	1156	
	75	二次加工剥片	C-3・IV	黒曜石(桑ノ木津留)	(2.40)	(4.00)	(1.40)	(8.43)	1185	
	76	二次加工剥片	C-5・IV	チャート	(2.40)	(1.80)	(0.70)	(2.30)	1127	
	77	二次加工剥片	B-3・V	黒曜石(日東)	(2.20)	(2.40)	(0.70)	(3.27)	928	
	78	微細剥離剥片	C-6・IV	タンパク石	1.20	2.00	0.50	0.78	176	
	79	微細剥離剥片	B-3・IV	黒曜石(日東)	1.70	2.90	0.70	2.55	623	
	80	微細剥離剥片	B-2・IV	黒曜石(日東)	2.70	2.10	0.80	3.63	831	
	81	微細剥離剥片	B-2・III	黒曜石(日東)	4.60	4.30	1.70	21.23	579	
	82	剥片	B-4・IV	黒曜石(日東)	1.90	2.40	0.50	1.52	一括	
27	83	剥片	C-4・IV	チャート	5.40	2.70	0.80	6.61	一括	
	84	石核	C-3・IV	黒曜石(日東)	2.70	3.80	3.30	29.60	444	
	85	石核	C-3・IV	黒曜石(日東)	4.40	4.00	2.40	36.24	458	
	86	石核	14T・V	黒曜石(不明)	3.10	2.20	1.40	8.39	353	
	87	石核	E-5・IV	黒曜石(日東)	4.40	4.40	2.50	37.13	1157	
	88	石核	C-2・IV C-3・IV	黒曜石(日東)	5.00	6.00	3.00	68.80	58・505	



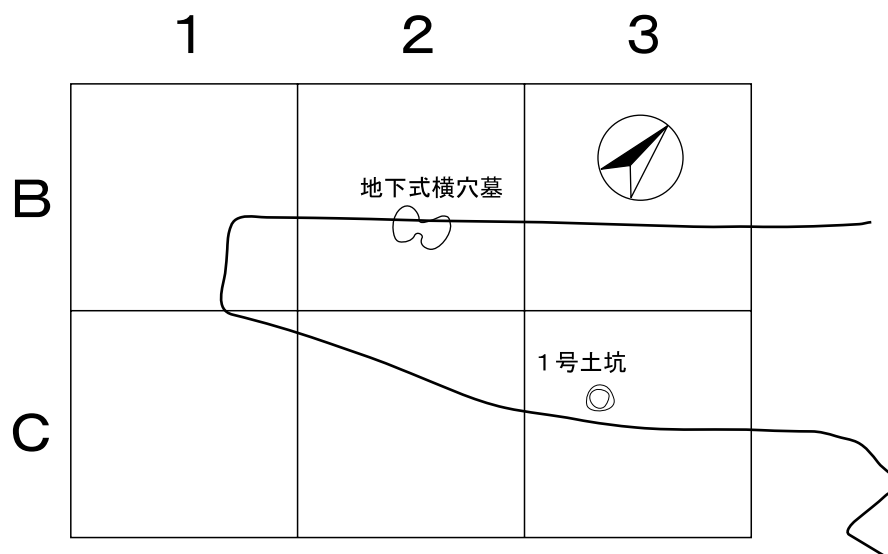
第28図 磨石ほか実測図

第9表 石器計測表(3)

挿図 番号	図 番号	器種	出土区・層	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	注記 番号	備考
28	89	磨石	14T・IV	安山岩	15.80	12.10	7.80	2070.00	25	
	90	凹石	B-3・IV	安山岩	7.70	5.90	3.70	170.00	657	
	91	磨石	C-6・V	安山岩	10.00	7.50	3.95	380.00	1032	
	92	磨石・敲石	B-3・IV	安山岩	11.30	9.25	3.50	640.00	757	
	93	石皿	C-5・IV	安山岩	13.90	9.50	2.20	390.00	996	磨面が不明確
	94	石皿	C-3・IV	安山岩	(10.10)	(8.00)	(3.50)	(380.00)	59	磨面が明確

第3節 古墳時代の調査

古墳時代該当のⅡ層からは，土坑1基と地下式横穴墓1基の遺構を検出した。（第29図）。



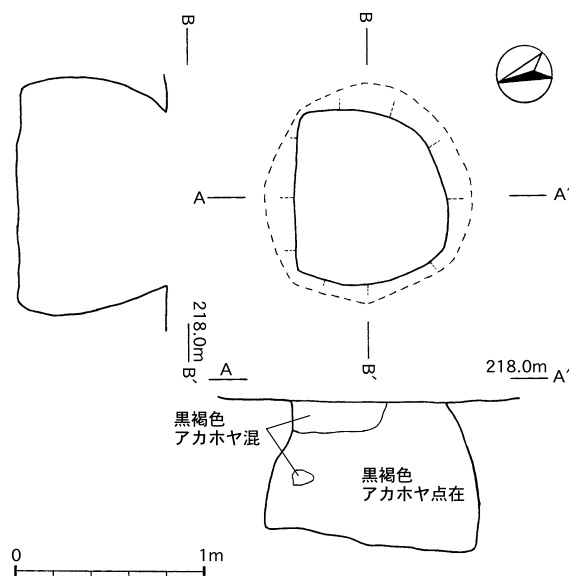
第29図 古墳時代遺構配置図

1 1号土坑（第30図）

C－3区で検出された。

B－2区で検出した地下式横穴墓の東側近くにあり，袋状の形状や掘り込み等の構造が，地下式横穴墓の竪穴の形状に類似することから，発見時は2号地下式横穴墓2号として検出に努めたが，羨道及び玄室等が付随しないことから，単体の土坑として取り扱った。

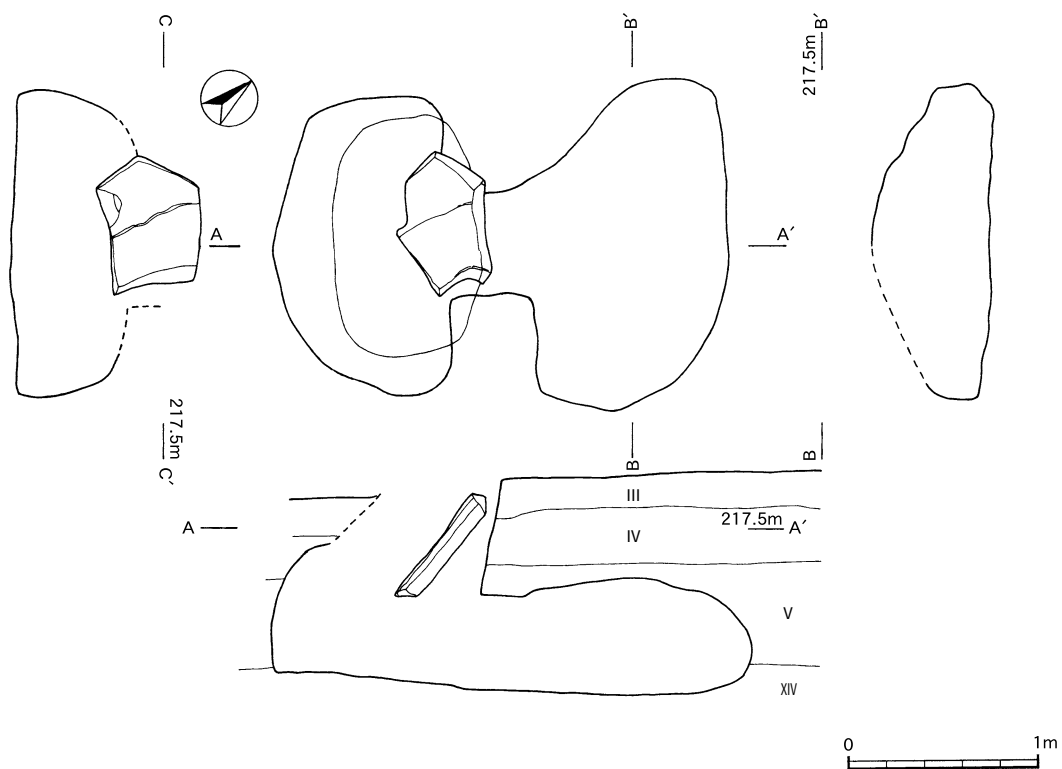
土坑の掘り込み上面は径80cm，床面は径110cm，深さ80cmで，袋状を呈している。床面はシラス層に掘り込まれる。



第30図 1号土坑実測図

2 地下式横穴墓（第31図）

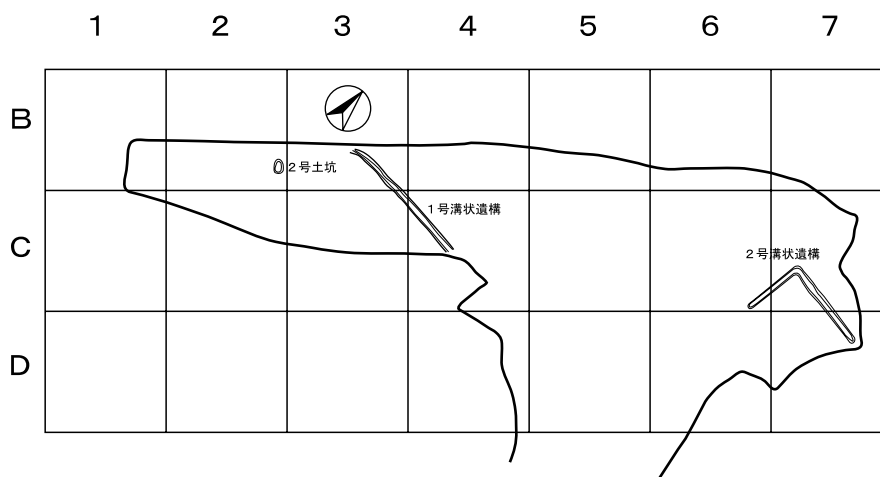
B-2区のⅡ層下面からⅢ層上面で検出し、主軸方向はN50度E、竪穴部から玄室の最長部は240cm程となる。なお、Ⅲ層～Ⅴ層は成層として堆積が確認できるが、Ⅴ層直下はⅩⅣ層のシラス層となり、床面が設置される。竪穴部は袋状の形状を成すが、玄室側では、ほぼ垂直に掘り込み、その深さは110cmで、短径55cm、長径100cmの、ほぼ楕円形を呈している。陥没した竪穴内に、安山岩の扁平な板石が、陥没した状態で残されていることから、板石は、竪穴の上部の閉塞に使用したものだと推測される。玄室との間は、幅55cm、奥行40cm、高さ50cmの羨道が設けられ、東側の玄室へ続いている。玄室への取付きは平入で、玄室は、長径180cm、奥行100cm、高さ60cmのほぼ楕円形で、天井部は、ドーム状を呈している。竪穴内に土が充填し、人骨や副葬品等は確認できていない。



第31図 地下式横穴墓実測図

第4節 中・近世の調査

Ⅱ層から溝状遺構と土坑が検出された。溝状遺構は、2条検出され、B・C-3・4区から検出された遺構を1号、C・D-6・7区から検出された遺構を2号として調査を進めた。土坑は、B-2区で1基検出された（第32図）。

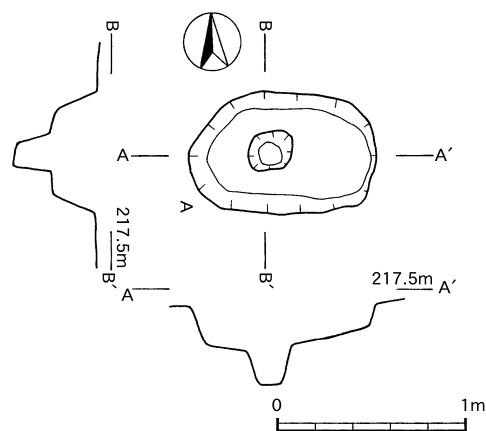


第32図 中・近世遺構配置図

1 2号土坑（第33図）

平面形は、長軸100cm×短軸65cmの楕円形で、検出面からの深さは45cmである。

床面に25cm×20cmの深さ20cmの円形をしたピットがある。埋土は黒色シルト質土で、しまりはなく柔らかい。

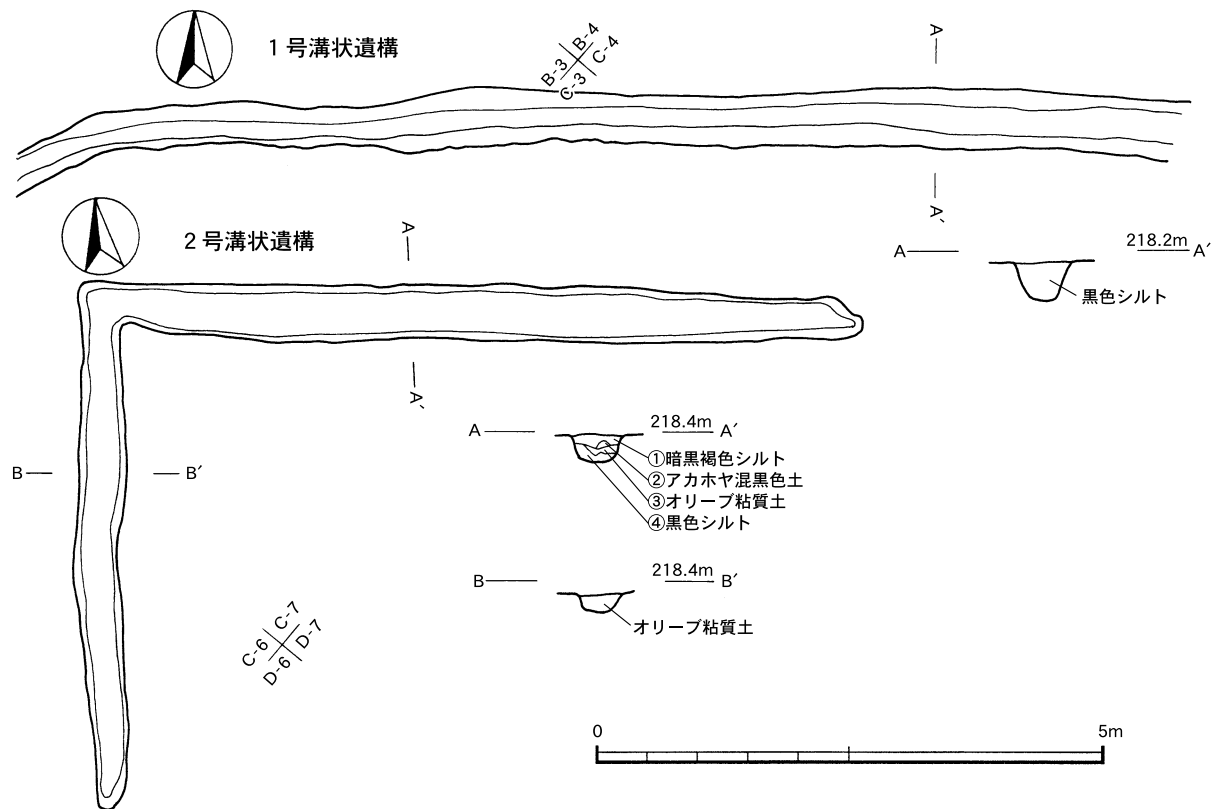


第33図 2号土坑実測図

2 溝状遺構（第34図）

1号溝状遺構は、長さが約11m50cm、幅が約40cm～60cm、深さが約40cmである。ほぼ東西方向に向かって検出されたが、調査区外へも延びると思われる。埋土は黒色シルト質土であった。

2号溝状遺構は、L字状となるもので幅は約50cm、深さは約20cm～30cmである。南北方向に約5m、東西方向に約8m検出された。



第34図 溝状遺構実測図

V章 まとめ

『日本城郭大系18』（新人物往来社 1979）には、「陣ノ尾城 大口市大口牛山城の支城。城址がある」（P.524）と明記しているが、今回の発掘調査では本遺跡から城址と確認できる遺構・遺物は発見されなかった。

以下に今回の調査での成果についてまとめる。

集石遺構が確認調査を含めて5基検出された。5基ともIV層上面で検出し、縄文時代早期の所産と判断できる。

1号集石遺構では確認できた礫が20点と少なく、また、掘り込み遺構や被熱等の痕跡も確認できないことから、この場での一時的機能を説明することは困難である。

2号集石遺構も掘り込み遺構等は確認されていないが、最大の特徴は、構成礫に石皿片を多用していることである。接合及び観察からは、5～6点以上の石皿が使用された可能性が高く、9点が接合した石皿は8.4kgに復元されている。

3号集石遺構、4号集石遺構はそれぞれ37点、53点の礫が認められた。一部の礫には被熱によると思われる赤化が認められた。石材は安山岩が多かった。

唯一5号集石遺構が掘り込み遺構を伴い、掘り込み遺構からは炭化物も検出されることから、いわゆる石蒸しの機能が想定可能な施設である。

確認調査では下剥峯式土器、塞ノ神式土器、押型文土器が出土し、本調査では円筒形条痕文土器、押型文土器、平椀式土器、晩期土器が出土した。土器の出土総数は少なく、形態や文様による詳しい分類等はできなかった。

縄文時代早期の遺物包含層から耳栓状土製品が2点出土した。本県内における耳栓（土製耳飾り）の出土は、本遺跡を含めて10遺跡で43個体と報告されている。

2点の耳栓は、推定外径が8.0cmと6.0cmと比較的大型であり、平椀式土器の所産と見られる。なお、南九州では、縄文時代早期後半（平椀式土器・塞ノ神A式土器）に耳栓が存在することが知られ、今回の2点もそれらを補完するものである。

縄文時代早期の遺物包含層から石鏃・スクレイパーなどの剥片石器、磨石・石皿などの礫石器が出土した。剥片石器の石材は、黒曜石及びチャートが多い。なお、黒曜石は日東産が主体となっている。

本遺跡の地下式横穴墓は、竪穴上面を板石で閉塞するタイプで、既に、諏訪野地下式横穴墓群や瀬ノ上地下式横穴墓群でその存在が知られており、改めて補完する発見となった。

なお、諏訪野地下式横穴墓群や瀬ノ上地下式横穴墓群からは、鉄製の武器等が副葬されることが知られているが、本例では確認されていない。

本遺跡の地下式横穴墓については、出土品が確認できないことから明確に提示できないが、その造営に関しては5世紀～8世紀とされている。また、これまでの知見では、玄室形状が家形で羨道との取り付けが妻入りを成す構造が先行するとされ、本例のように玄室形状がドーム状で平入りの構造は後出するとされている。このような視点で判断すると、本例は後出する新しい時期の所産と

いえる。

なお、大口市内では、これまでに14基が確認されている。本遺跡の近隣に成就寺地下式横穴墓群がある。昭和31年2月に寺師見国氏により調査が行われ、2基の地下式横穴墓が発見された。2基の玄室の面積はそれぞれ約1.6㎡と約1.3㎡であり、本遺跡の玄室は約1.8㎡で、大差はない。今後は、本遺跡の地下式横穴墓と成就寺地下式横穴群との関連性について検討していく必要がある。

【参考文献】

- 1 1979『日本城郭大系18』[新人物往来社]
- 2 新東 晃一 2006「九州の縄文時代の二つの耳飾り」『縄文の森から』第4号 鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 3 設楽 博己 1995「土製耳飾」『縄文文化の研究』9 雄山閣
- 4 中村 耕治 2006「第4章 古墳時代 第3節 死語の世界」『先史・古代の鹿児島』通史編 鹿児島県教育委員会
- 5 樋渡将太郎 2001「薩摩（鹿児島県）の地下式横穴墓」『第4回九州前方後円墳研究会大会 九州の横穴墓と地下式横穴墓』第Ⅱ分冊－資料編－ 九州前方後円墳研究会

写真図版

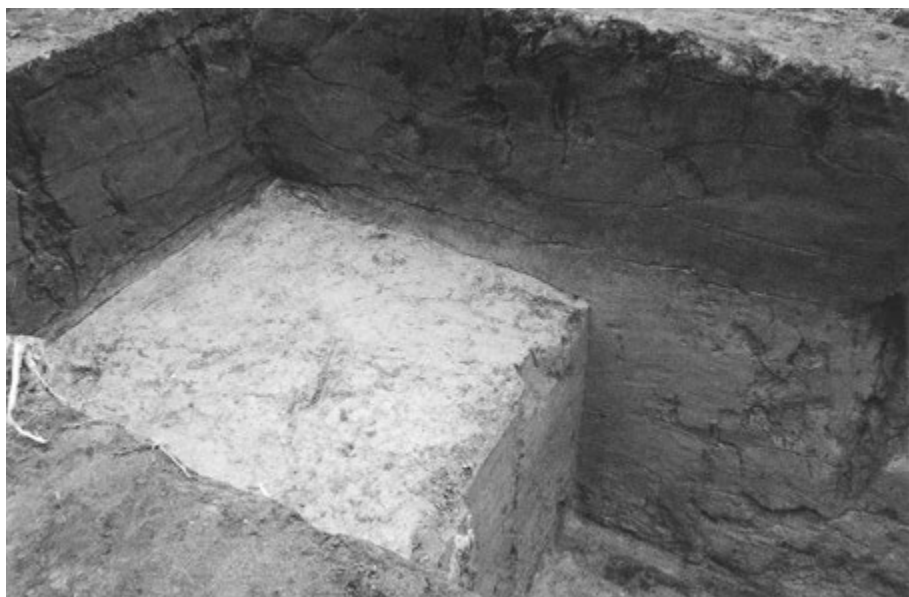


上：台地西端部より大口市街地を望む
下：調査前風景

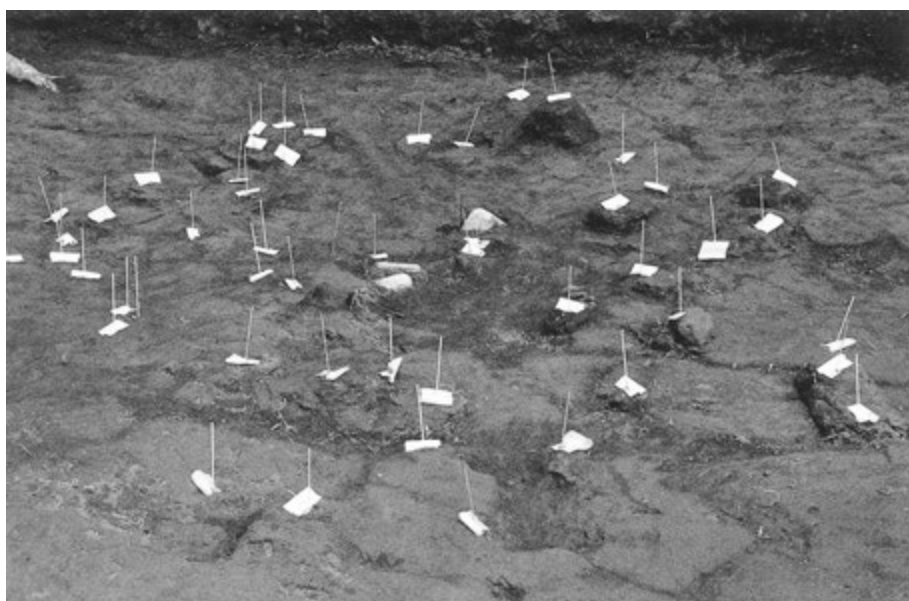
写真図版 2



調査風景



土層断面 (15トレンチ)



Ⅳ・Ⅴ層遺物出土状況
(B・C-7区)



1 号集石検出状況



2 号集石検出状況



5 号集石検出状況

写真図版 4



左上：2 T 出土状況

左下：15 T 内Ⅳ層 O B 出土状況

右上：14 T 内Ⅲ・Ⅳ層遺物出土状況

右下：耳栓状土製品出土状況（Ⅳ層，C-7 区）



地下式横穴墓検出状況



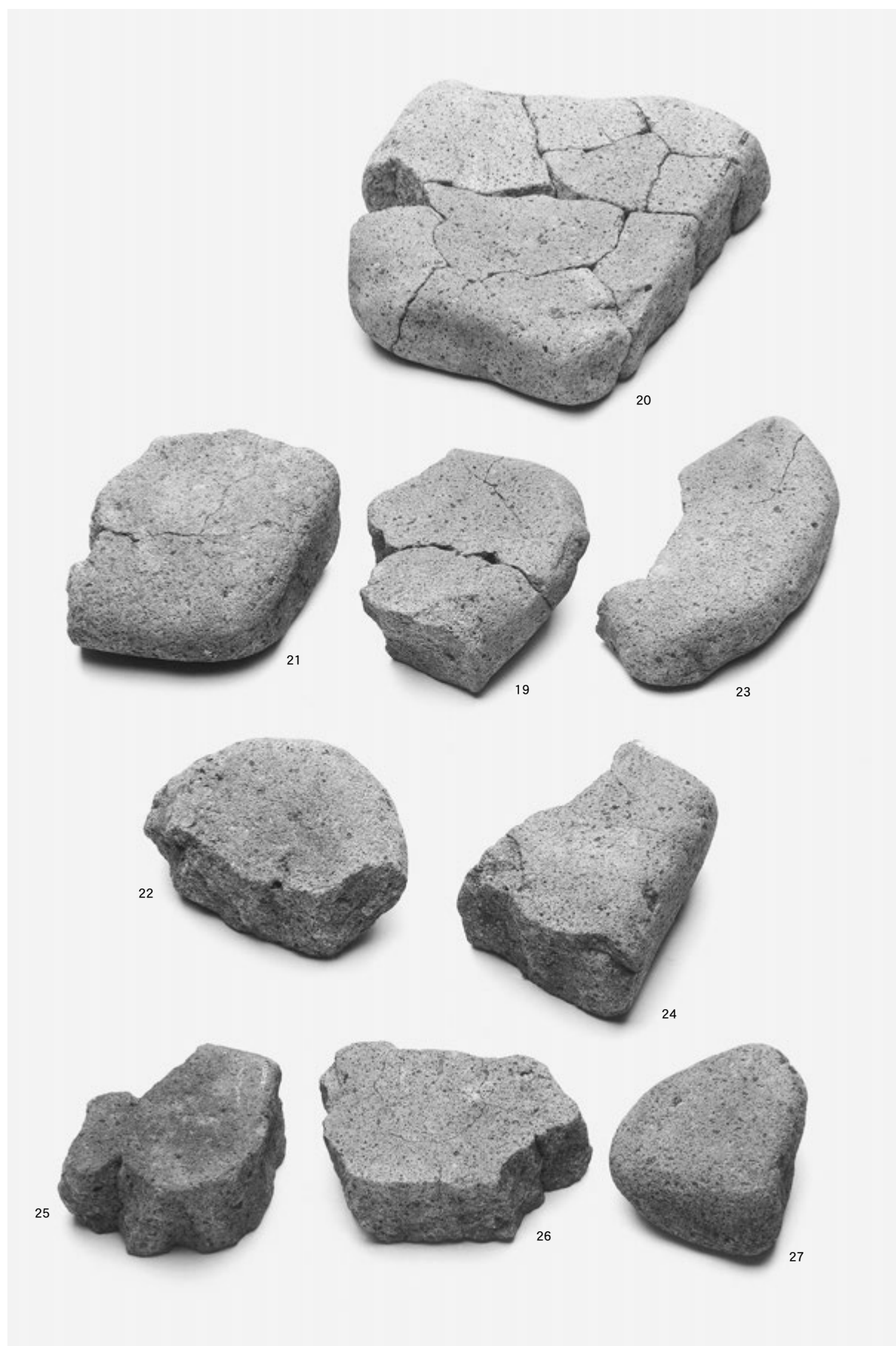
地下式横穴墓・ふた石



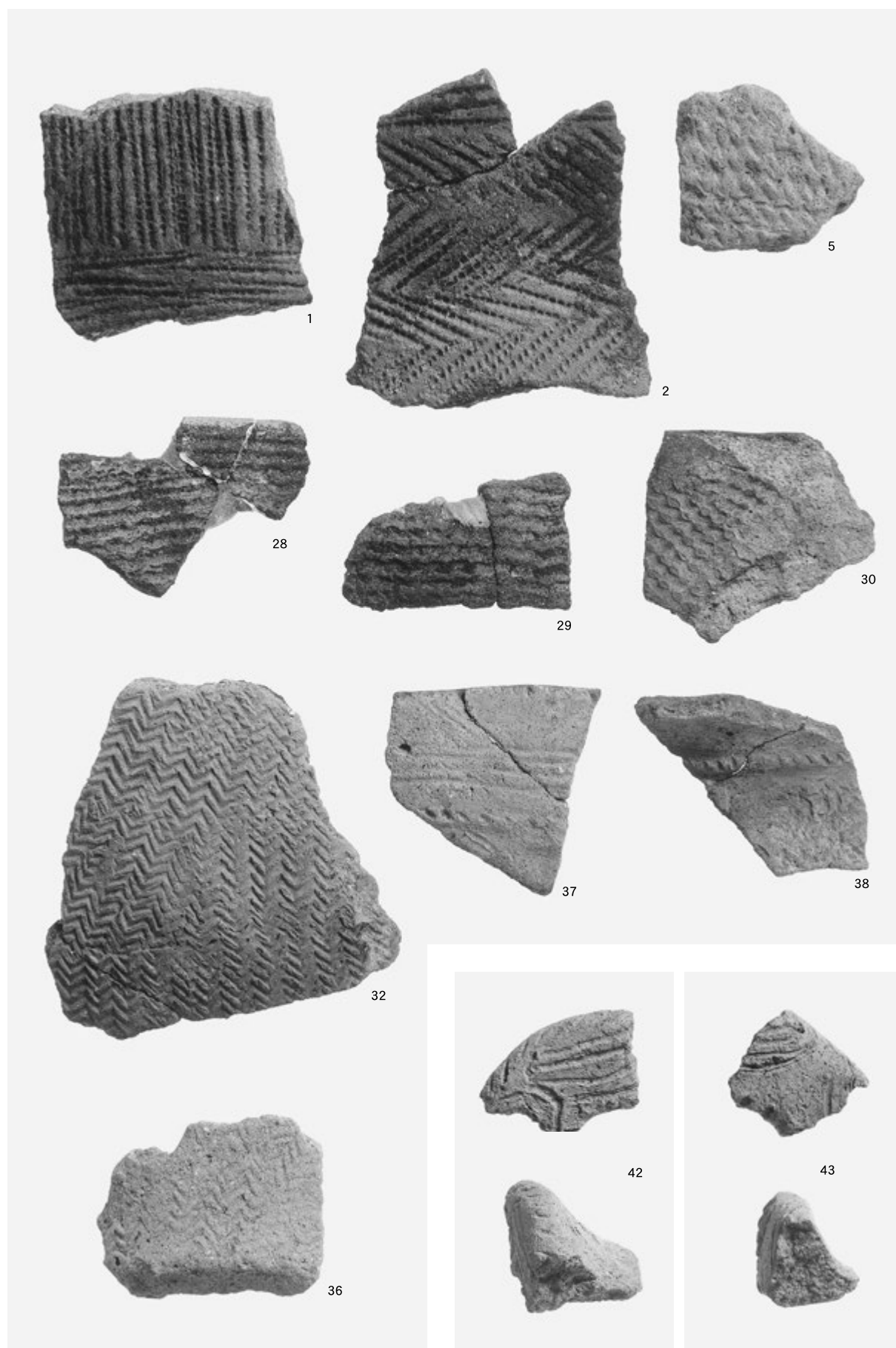
地下式横穴墓完掘状況



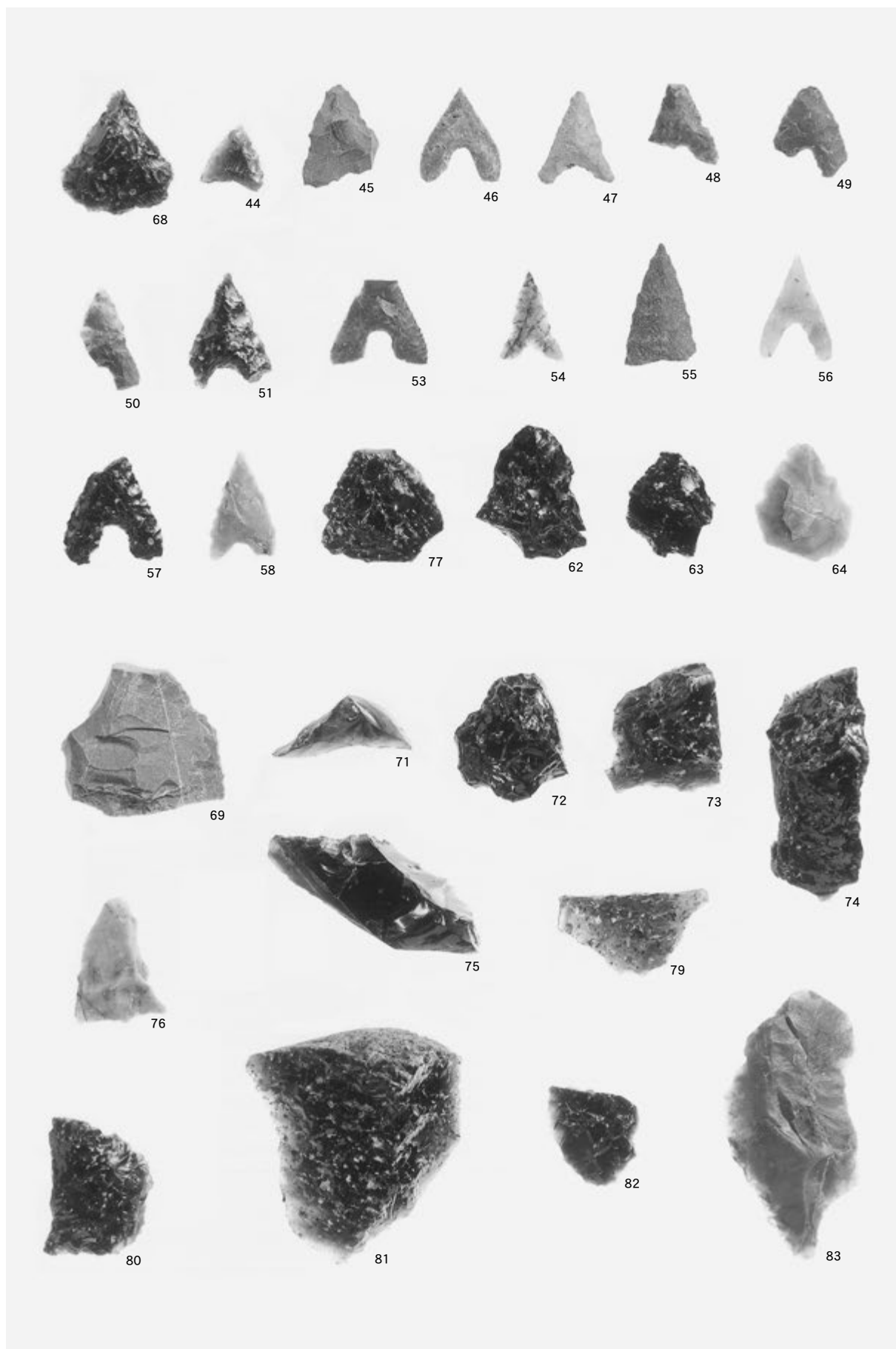
左：1号溝状遺構完掘状況（Ⅱ層，BC-3・4区）
右：2号土坑完掘状況（B-2区）
下：2号溝状遺構完掘状況（C・D-5・6区）



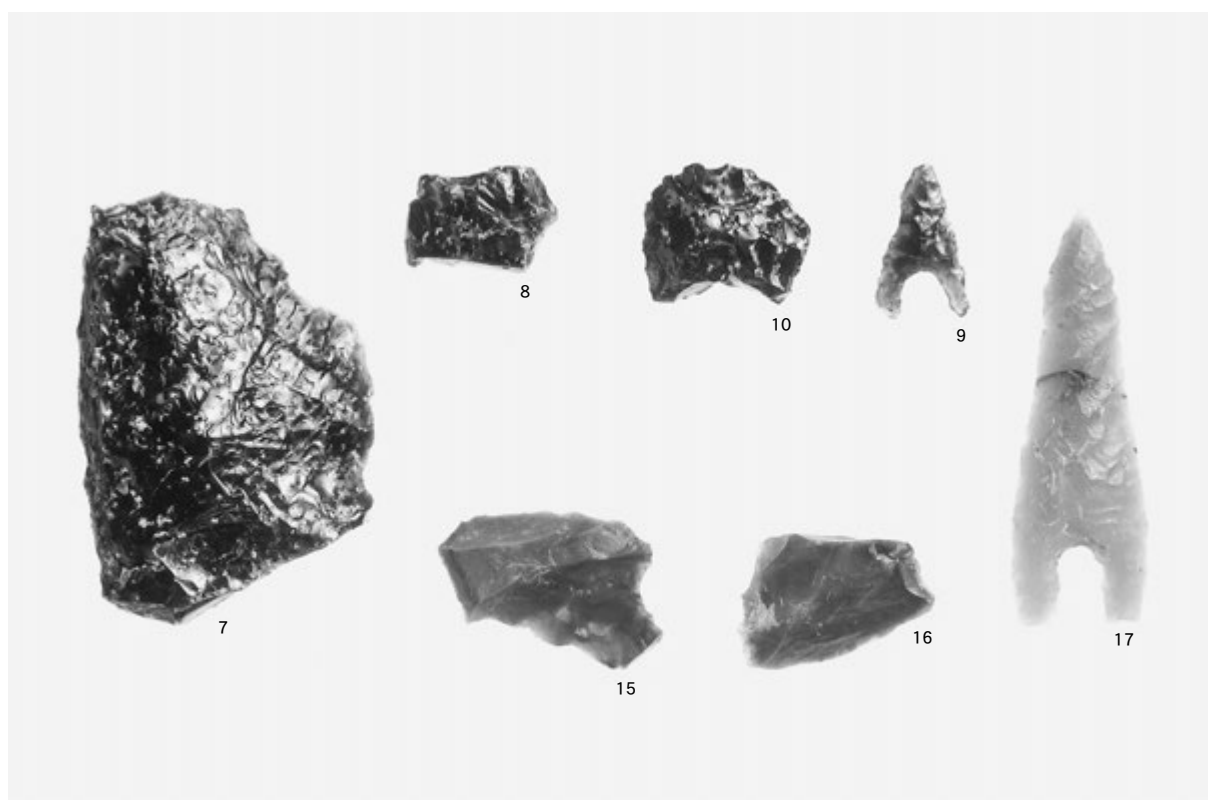
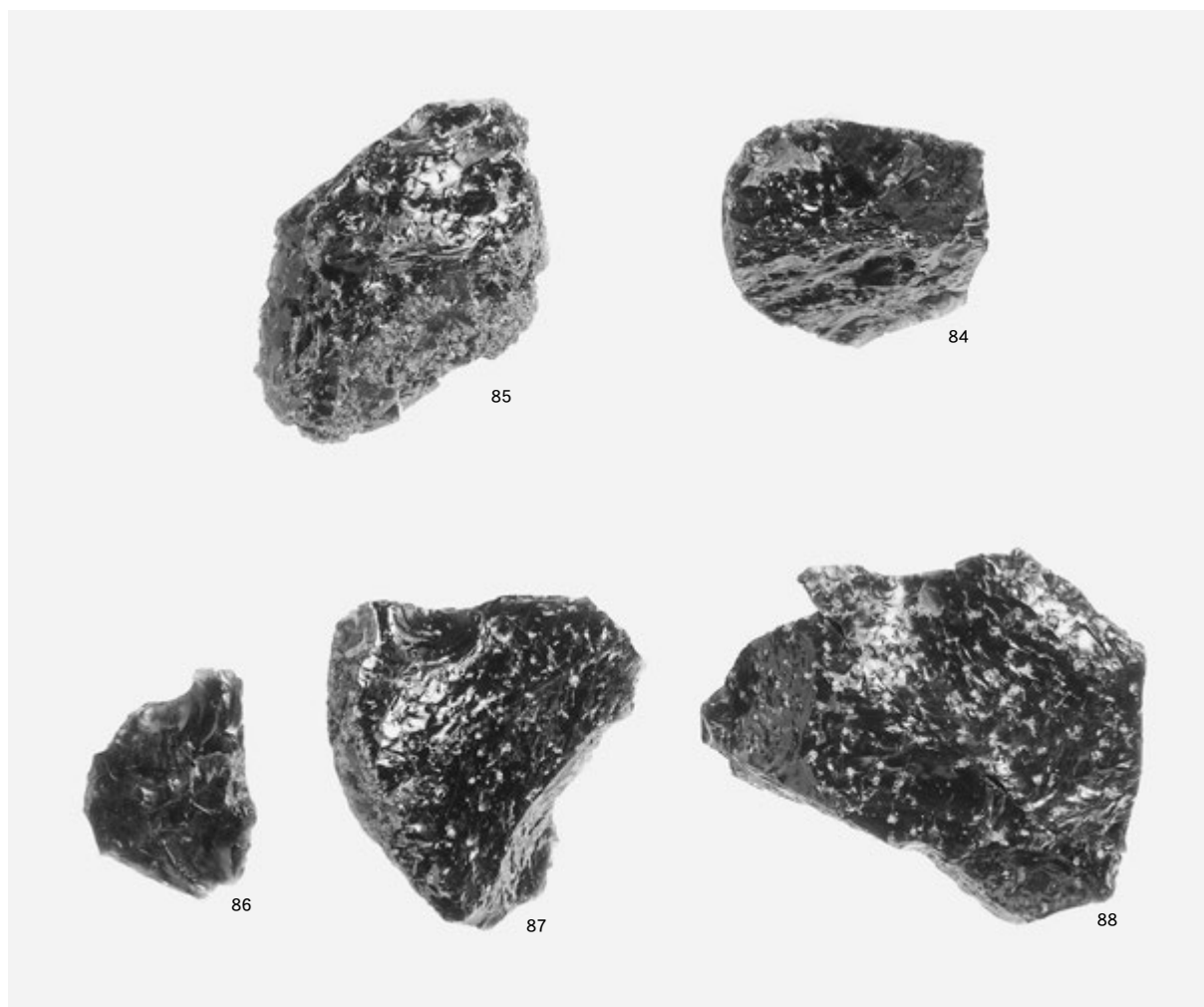
2号集石遺構内遺物



Ⅲ・Ⅳ層出土石器，Ⅳ層出土耳栓状土製品



Ⅳ層出土石器



上：Ⅲ層出土石核
下：Ⅳ層出土石器

あとがき

国道267号線道路改良事業に伴って実施した『陣之尾遺跡』発掘調査の報告書を刊行することができました。

「陣ノ尾城跡」として調査を行いました。残念ながら、今回の発掘調査区内からは、城址と確認できる遺構も検出されず、遺物も出土しませんでした。陣之尾城については、今後の研究に委ねたいと思います。

しかし、舌状丘陵の南端といえば縄文人が好む場所。やはり、彼らは暮らしていました。耳栓状土製品で身を飾りながら・・・・・・・・。

本報告書にまとめた発掘の成果の数々は、発掘作業・整理作業に携わってくださった方々の努力と、鹿児島県土木部道路建設課をはじめ、多くの方々の協力によるものと感謝しております。

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（134）

国道267号線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

陣之尾遺跡

発行日 平成21年1月

発 行 鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号
T E L (0995) 48-5811

印刷所 株式会社あすなろ印刷
〒899-0041 鹿児島市城西2-2-36
T E L (099) 214-3757

